日田市埋蔵文化財調査報告書第79集

葛原遺跡Ⅲ

－Ｆ・Ｈ・Ｉ区の調査報告－

２００７年

日 田 市 教 育 委 員 会

序　　文

葛原遺跡は市内でも古くから石器が採集される場所として周知されてきた遺跡の一つで、遺跡のある台地上には旧石器時代から中世に至るまでの集落跡や山城などが残っています。

今回報告します調査内容は、道路・ポンプ場・民間工場といった各建設工事に先立って発掘調査を行った三箇所の調査成果を一冊にまとめ、「葛原遺跡Ⅲ」として発行するものです。

調査では各々の発掘区より、縄文時代や弥生時代の竪穴住居をはじめとします古代の遺構や遺物が発見されています。

すでにこの遺跡では、発掘調査で発見された古墳時代の竪穴住居が、三和酒類いいちこ日田蒸留所内に復元されており、多くの来訪者の目にとまるなど文化財の活用が図られています。

このように遺跡の活用がますます望まれるところでもあり、また本書がこうした文化財の保護、地域の歴史や学術研究の解明、小中学生の社会教材資料等に寄与されれば幸いです。

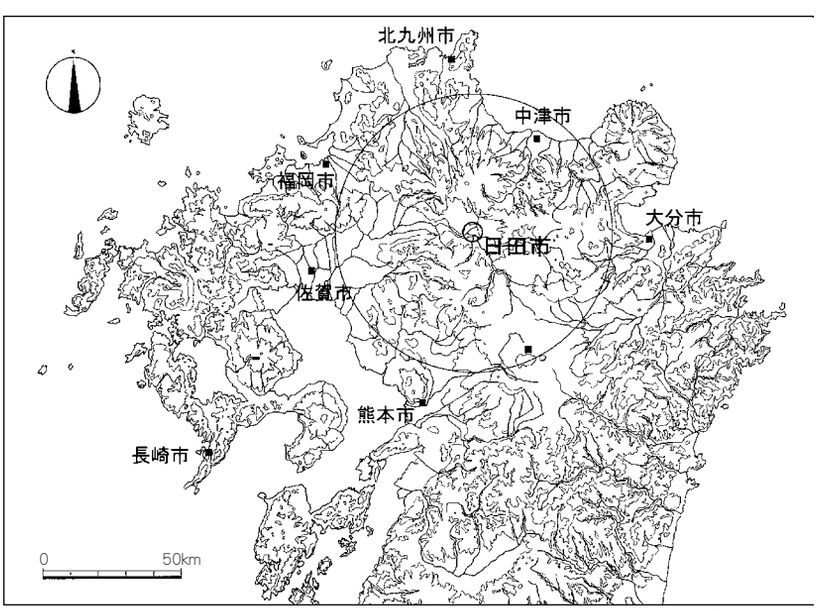
最後に、調査から整理・報告書作成にいたるまでご指導、ご協力を賜りました土地所有者をはじめとします多くの関係者の皆様方に対し、心より厚くお礼を申し上げます。

平成 19 年 3 月

日田市教育委員会
教育長　諫　山　康　雄

例　　言

１．本書は、日田市教育委員会が実施した葛原遺跡Ｆ～Ｉ区の発掘調査報告を合本したものである。
２．各調査にあたっては日田市土地開発公社、日田市水道課、日田市土木課のほか、土地所有者の皆さんのご協力を受けた。
３．調査現場での実測・写真撮影は調査担当者が行った。
４．本書に使用した遺構図の方位は、全て磁北である。
５．本書に掲載の遺物実測・製図は、調査担当者と中川照美（日田市調査補助員）が行ったほかに、一部を雅企画有限会社・（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
６．また、遺物写真は長谷川正美氏（雅企画有限会社）に撮影委託した成果品を使用している。
７．写真図版中の番号は、全て挿図番号と一致する。
８．出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
９．本書の執筆は、Ⅰ～Ⅲ・Ⅵを土居、Ⅰ・Ⅳを行時、Ⅴを今田が行なった。
10．本書の編集は、土居・行時・今田で協議し行なった。



日田市の位置

目　　次

Ⅰ.　調査に至る経過と組織 …… 1

Ⅱ.　遺跡の立地と環境 …… 3

Ⅲ.　Ｆ区の調査 …… 5

Ⅳ.　Ｈ区の調査 …… 11

Ⅴ.　Ｉ区の調査 …… 21

Ⅵ.　まとめ …… 33

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡分布図（1/25000） …… 3
第２図　調査区位置図（1/5000） …… 4
第３図　Ｆ区遺構配置図（1/400） …… 6
第４図　Ｆ区１・２号土坑実測図（1/40） …… 6
第５図　Ｆ区３～12号土坑実測図（1/40） …… 7
第６図　Ｆ区13～21号土坑実測図（1/40） …… 8
第７図　Ｆ区22～31号土坑実測図（1/40） …… 9
第８図　Ｆ区土坑出土遺物実測図（1/4・2/3・1/2） …… 10
第９図　Ｈ区遺構配置図（1/200） …… 11
第10図　Ｈ区１号竪穴住居実測図（1/60） …… 13
第11図　Ｈ区２号竪穴住居実測図（1/60） …… 13
第12図　Ｈ区３号竪穴住居実測図（1/60） …… 14
第13図　Ｈ区１号掘立柱建物実測図（1/60） …… 14
第14図　Ｈ区１～４号土坑実測図（1/40） …… 15
第15図　Ｈ区５～７号土坑実測図（1/40） …… 16
第16図　Ｈ区８～10号土坑実測図（1/40） …… 17
第17図　Ｈ区出土土器実測図（1/4） …… 18
第18図　Ｈ区出土石器実測図（1/2・2/3） …… 19
第19図　Ｉ区遺構配置図（1/500） …… 22

第20図　Ⅰ区竪穴遺構実測図（1/60）…… 23
第21図　Ⅰ区竪穴遺構出土遺物実測図１（1/4）…… 23
第22図　Ⅰ区竪穴遺構出土遺物実測図２（1/4・2/3）…… 24
第23図　Ⅰ区土坑実測図１（1/40）…… 25
第24図　Ⅰ区土坑実測図２（1/40）…… 26
第25図　Ⅰ区土坑実測図３（1/40）…… 27
第26図　Ⅰ区土坑実測図４（1/80）…… 28
第27図　Ⅰ区土坑出土遺物実測図（1/4・1/2・2/3）…… 29
第28図　Ⅰ区のその他の出土遺物実測図１（1/4・2/3）…… 30
第29図　Ⅰ区のその他の出土遺物実測図２（2/3）…… 31

表　目　次

第１表　竪穴住居・竪穴遺構観察表 …… 34
第２表　掘立柱建物観察表 …… 34
第３表　土坑観察表 …… 34
第４表　溝観察表 …… 35
第５表　出土土器観察表 …… 35
第６表　出土石器観察表 …… 37

写　真　図　版　目　次

写真図版１　Ｆ区全景、Ｆ区１・３～６・10～13号土坑
写真図版２　Ｆ区14～22・24・25・28・29号土坑
写真図版３　Ｆ区出土遺物
写真図版４　Ｈ区全景
写真図版５　Ｈ区１～３号竪穴住居、４・５・６・９号土坑
写真図版６　Ｈ区出土遺物
写真図版７　Ⅰ区全景、竪穴遺構、５・14・18号土坑
写真図版８　Ⅰ区出土土器
写真図版９　Ⅰ区出土石器１
写真図版10　Ⅰ区出土石器２

Ⅰ．調査に至る経過と組織

(1) F・G区

この調査の発端は、昭和 62 年 6 月 22 日付け市土木課長名で市道三ノ宮バイパス新設工事に伴う埋蔵文化財の照会文書が市教委に提出されたことによる。工事は葛原台地上に進出が決まっていたニッカウヰスキー工場建設に伴うもので、すでに市教委は葛原遺跡A～E区の発掘調査を実施しており、工事路線内に遺跡の存在する可能性が高いと判断し、計画内の二箇所（F・G区）に試掘坑を入れた。結果、今回報告するF区において遺構が検出されたため、緊急の発掘調査を実施することになった。なお、G区については遺構が検出されなかったため、発掘調査には至っておらず、今回の報告には掲載しない。

発掘調査は昭和 62 年 8 月 3 日より試掘調査結果を基に遺構が確認された範囲を対象に開始し、機械で表土を除去した後に、遺構検出作業を行った。調査では個別の遺構の掘り下げ、写真撮影、実測の各作業を順次行ったが、本調査と並行したA～E区の調査もあって途中作業を中断し、10 月 8 日には全作業を終えた。

(2) H区

調査の対象となった北部簡易水道事業は、平成 6 年度に日田市財津町、藤山町、三河町に配水するための配水タンクを葛原台地上の大字西有田字葛原 833-1 に建設することを目的として事業計画が決定された。本事業が実施される工事予定区域は、昭和 62 年度に株式会社ニッカウヰスキー九州工場建設及び市道葛原線建設に先立ち発掘調査を実施した地区に隣接しており遺構の存在する可能性が高いことから、市水道課と協議を行い平成 6 年 8 月 22 日～ 23 日に試掘調査を実施した。調査の結果、事業予定区域内より柱穴や土坑等の遺構の存在が確認されたことから、再度市水道課と遺跡の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、遺跡の保存は事業の緊急性などから困難であり年度内には工事を着手したいとの意向であったため、平成 6 年 12 月 16 日より国庫補助事業の予算をもって緊急の発掘調査を実施することとなった。

発掘調査では、簡易水道施設の建設予定範囲が 1 筆全体に及ぶことから、機械により全体の表土を除去したのち、遺構検出作業に移っていった。遺構検出面は、表土除去と同時に黄褐色の地山が現れるとともに柱穴や土坑などの遺構が検出された。調査では個別の遺構ごとの掘り下げ・写真撮影・実測の各作業を順次行い、平成 7 年 1 月 21 日にはすべての発掘調査業務を完了することができた。

(3) I区

調査は、平成 8 年 3 月 29 日付け市企業立地対策室長名で企業誘致事業に伴う埋蔵文化財の照会文書が市教委に提出された。事業予定地はこれまでに数回の発掘調査が行われ、遺構が発見されると予想されたので、試掘調査の必要があるとの回答を行った。その後、小久保製氷冷蔵株式会社の正式な進出の決定を受け、試掘調査を 6 月 18 日に実施した。試掘調査の結果、土坑などの遺構が発見されたため、企業立地対策室等との協議を行ったが、造成の掘削部分に遺跡が存在することから、現状保存や工法変更は不可能との結論に達し、緊急の発掘調査を行うことになった。

発掘調査は、平成 8 年 7 月 10 日より開始した。調査では機械で全面の表土剥ぎを行い、並行して遺構検出作業を行ったが、炎天下でもあり、また遺構面がローム層ということもあって遺構検出作業には時間を費やすことになった。その後は個別の遺構の掘り下げ、写真撮影、実測の各作業を順次行い、8 月 8 日には空撮を実施し、8 月 10 日には全ての作業を終了した。

(4) 調査組織

F区の発掘調査／昭和 62 年度 (1987)

調 査 主 体　日田市教育委員会　　調査責任者　楢原芳彦 (教育長)

調 査 事 務　武石邦男 (日田市立博物館長) 小埜サダ子 (同事務員)

調　査　員　土居和幸 (同学芸員) 友岡信彦 (同課嘱託・現、大分県教育委員会)

調査補助員　江藤和幸 (別府大学・現、宇佐市教育委員会) 藤本啓二 (別府大学・現、国東市教育委員会)

発掘作業員　安心院春子　諫山愛子　諫山公子　諫山ユミ子　巌典子　内野孝子　後藤大輔　後藤ツヤ子　坂本和代
佐藤千代吉　貞清カナエ　白石政信　高倉慶　高倉洋礼　立花幸　長尾トラ子　中島トミ子　中島幸江
中島マサ子　藤原ナツエ　森山朋美　森山敬一郎　森山孝子　森山信義　森山好美　了正美代子

H区の発掘調査／平成 6 年度 (1994)

調 査 主 体　日田市教育委員会　　調査責任者　加藤正俊 (教育長)

調 査 事 務　原田良伸 (文化課課長) 財津寅日出 (同課長補佐兼文化財係長)

調　査　員　土居和幸 (同主任) 行時志郎 (同主事) 松下桂子 (同主事補) 森山敬一郎 (同嘱託)

発掘作業員　秋ヤエ子　秋吉ミユキ　石井ツヤ子　石井トモ子　栗秋ミズエ　五反田静子　坂本和代　坂本ムツ子
桜木十四子　清水忠造　庄内武子　長尾美智子　松井鈴子　森山ハナ子　森山好美　柚木ユキエ
吉長澄江

I区の発掘調査／平成 8 年度 (1996)

調 査 主 体　日田市教育委員会　　調査責任者　加藤正俊 (教育長)

調 査 事 務　原田俊隆 (文化課課長) 長尾幸夫 (同課長補佐兼文化財係長)

調　査　員　土居和幸 (同主任) 行時志郎 (同主事) 松下桂子 (同主事補) 永田裕久 (同主事補) 森山敬一郎 (同嘱託)

発掘作業員　秋吉ミユキ　安達義男　有富雪子　伊藤キヨ子　伊藤大輔　江藤勝義　加納健作　上川彰　北澤幾子
財津由太　酒井光敏　佐藤み代子　園田光子　高倉富美子　高倉美利　田中昇　津江久徳　中嶋泉
中島カズ子　中島和子　中島ツネ子　中島トミエ　中島ヨシ子　松岡初次　森山和徳　吉長澄江
渡辺千美子

報告書作成／平成 18 年度 (2006)

調 査 主 体　日田市教育委員会　　調査責任者　諫山康雄 (日田市教育委員会教育長)

調 査 統 括　後藤　清 (文化財保護課課長)

調 査 事 務　高倉隆人 (同課長補佐兼埋蔵文化財係長) 伊藤京子 (同専門員)、中村邦宏 (同主事補)

調　査　員　行時桂子・若杉竜太・渡邉隆行 (同主任) 矢羽田幸宏 (同主事)

調査補助員　中川照美　杉野貴幸

報告書作成　土居和幸 (日田市総務財政部税務課副主幹) 行時志郎 (日田市農林経済部農政推進課主査)
今田秀樹 (文化財保護課主任)

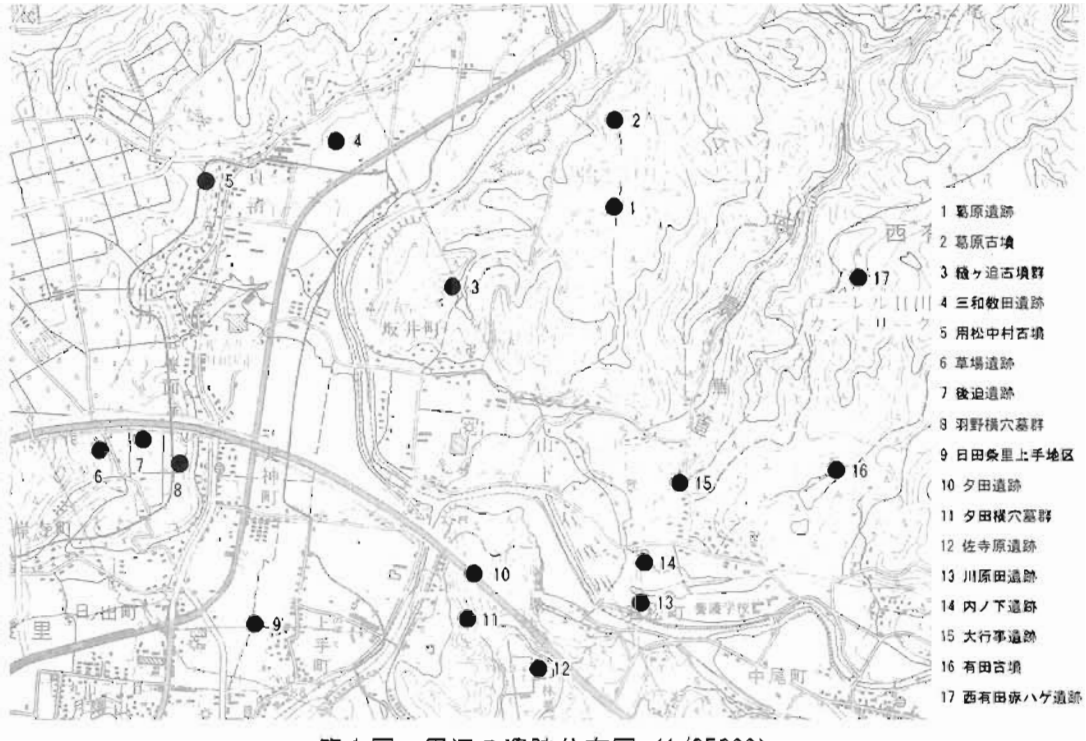
Ⅱ．遺跡の立地と環境

葛原遺跡は日田市北東部の標高 170 m前後を測る通称“葛ケ原”と呼ばれる広さ約 16ha の台地上に位置する。台地西側下を花月川が南流し、台地南側下にはその支流である有田川が西へと流れ、台地の南西部で合流している。両河川は台地に接するように流れており、このため台地下における沖積地の面積は狭く、また台地東側は急な谷部を形成している。台地上は緩やかな起伏がみられ、これまでは主に畑や山林として利用されていたが、工場建設などにより様子は変わろうとしている。

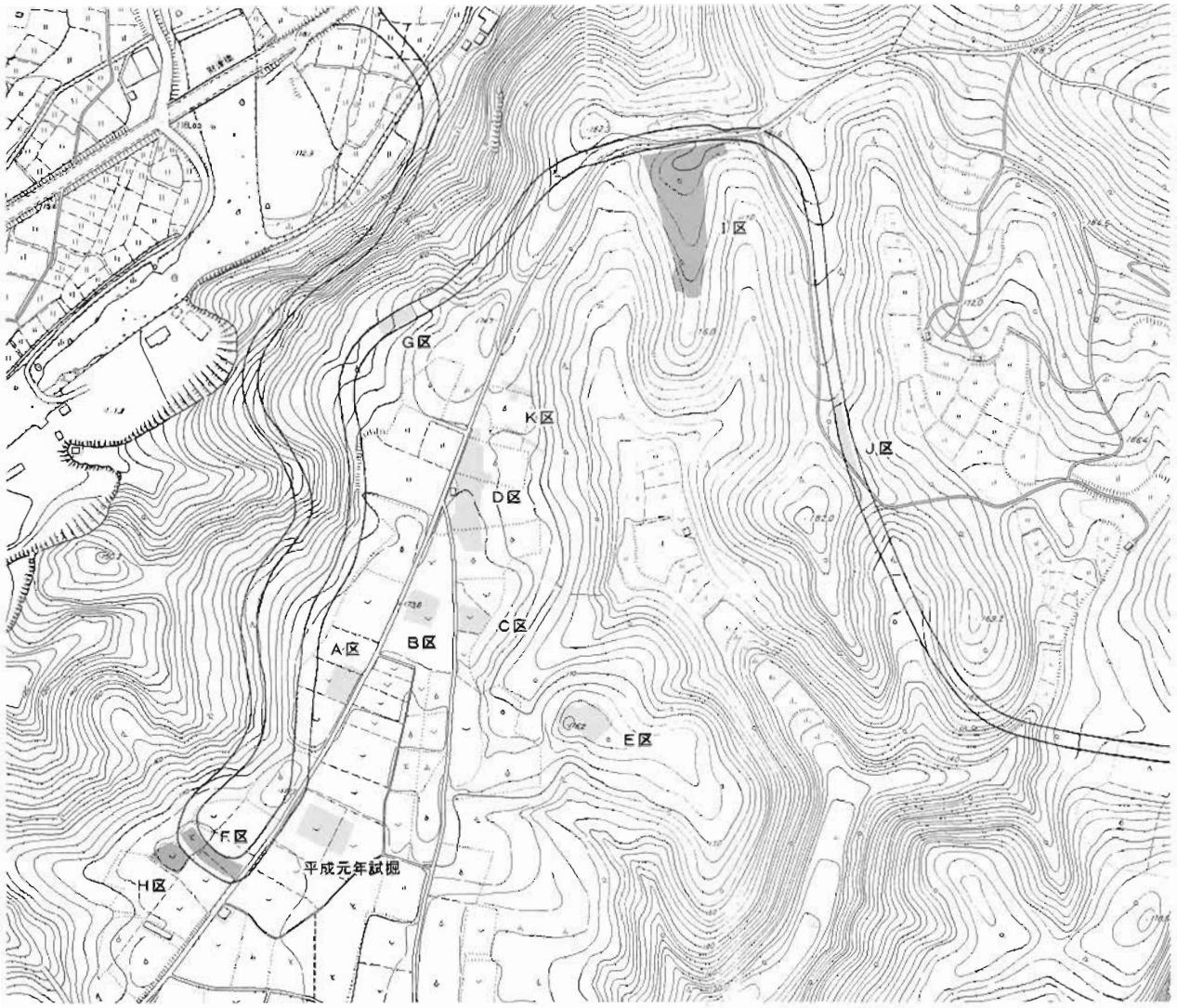
周辺の遺跡を概観すると、花月川流域の沖積地には三和教田遺跡 (4) や日田条里上手地区 (9) が存在する。前者はこれまでの調査で旧石器時代～中世の複合遺跡であることが判明し、弥生時代の環濠集落も発見されている。また右岸の山田原台地上には弥生時代の大規模集落である後迫遺跡 (7) や方格規矩鏡片が発見された草場遺跡 (6)、用松中村古墳 (5) などが所在し、台地東斜面には 5 ～ 8 世紀の羽野横穴墓群 (8) が営まれている。

いっぽう、有田川下流域の沖積地には内ノ下遺跡 (14) や川原田遺跡 (13) が存在し、丘陵上には古墳時代の集落が調査された大行事遺跡 (15) や西有田赤ハゲ遺跡 (17) のほかに、古墳時代中期の有田古墳 (16) がそれぞれ位置している。川を挟んで対峙する佐寺原台地上の佐寺原遺跡 (12) では弥生時代前～後期の集落が発掘され、その端部には夕田遺跡 (10)、台地斜面には 5 ～ 7 世紀の夕田横穴墓群 (11) がこれまでに調査されている。

さて、葛原遺跡ではこれまでに6回の発掘調査が行われている。A～E区では縄文時代の土坑群や、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物などが発見されており、J区では古墳時代後期の竪穴住居などが発掘されている。これらの調査は主に台地（遺跡）の北半分に集中しているが、遺構は台地全面に展開している。本格的な調査は行われていないが遺跡南側には中世の城跡、さらに斜面中腹には円墳 3 基で構成される縫ケ迫古墳群 (3)、台地の北側には葛原古墳 (2) の存在が知られている。



第１図　周辺の遺跡分布図（1/25000）



第2図　調査区配置図（1/5000）

（参考文献）

渋谷忠章他編『日田市羽野横穴墓群発掘調査概報』大分県教育委員会　1993年

行時　志郎編『西有田赤ハゲ遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第7集　日田市教育委員会　1992年

吉田　博嗣編『三和教田遺跡C地点』大分県文化財調査報告書第98輯　大分県教育委員会　1997年

友岡　信彦編『夕田遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(14)　大分県教育委員会　1999年

友岡　信彦編『後迫遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(18)　大分県教育委員会　2001年

渡邉　隆行編『内ノ下遺跡・大行事遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第33集　日田市教育委員会　2002年

若杉　竜太編『後迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第35集　日田市教育委員会　2002年

渡邉　隆行編『葛原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第39集　日田市教育委員会　2002年

土居　和幸編『葛原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第53集　日田市教育委員会　2004年

Ⅲ．Ｆ区の調査

(1) 調査の概要（第３図）

発掘調査は、試掘調査において遺構が確認された道路建設予定地内を全面を機械によって表土を剥ぎ進めた。表土下は暗茶褐色土の地山で、調査において検出した遺構は土坑 30 基、ピット 93、溝１条である。このうち溝１条については後世のものである。土坑やピットについては調査区の北側に集中して存在する傾向にあった。調査面積は 497 ㎡である。

(2) 遺構と遺物

土坑（第４～７図、写真図版１・２）

検出した土坑は、その平面形態により円形（1）、楕円形もしくは長方形（3・6・13・16・21・22・24～29・31）、不整形（2・5・7・9～12・14・15・17・19・20・23・30）に分けられる。１号は二段掘りの土坑で、床面直上には壺が逆さまの状態で出土した。このほかにも弥生土器の甕や黒曜石の剥片などが出土している。２・４号からは弥生土器片、３号からは弥生土器片と剥片が数点出土。４・８号は重複関係にあり、４号が５・８号を、５号が６号を、７号が８号をそれぞれ切る。５・６号からは弥生土器片が数点出土。12 号は 13 号を切る。12・13 号からは弥生土器片が数点出土。14 号は 15 号を切る。16・17 号からは弥生土器片や黒曜石や剥片が出土しており、17 号は 18・19 号を切る。21 号からは弥生土器片が数点出土。28・29 号からは「く」字状に外反する甕と思われる弥生土器片が出土しており、28 号は 29 号を切る。

出土遺物（第８図、写真図版３）

１～４･６は甕である。１は「く」字状に短く外反する口縁部を有する小型の甕である。19 号出土。２は口縁部が「L」字状をなす小型の甕である。17 号出土。３･４は両甕とも口縁部が「L」字状をなす。３は口縁部が長く、４は短い。５は壺である。口縁部は外反し、端部は垂れ下がり気味。頸部下には二本の三角突帯が貼り付けられている。胴部はふくみをもち、最大径付近に二本の三角突帯が貼り付ける。３～５は１号出土。６は甕の底部。上底で、底は平坦。13 号出土。７はミニチュア土器の底部。17 号出土。

８・９は石鏃である。８は二次加工が縁辺部全周に施されている。両脚先端を欠く。黒曜石製。９は両脚先端と先端部を欠く。安山岩製。10 は打製石斧。安山岩製。８は１号、９は 17 号、10 は 16 号出土。

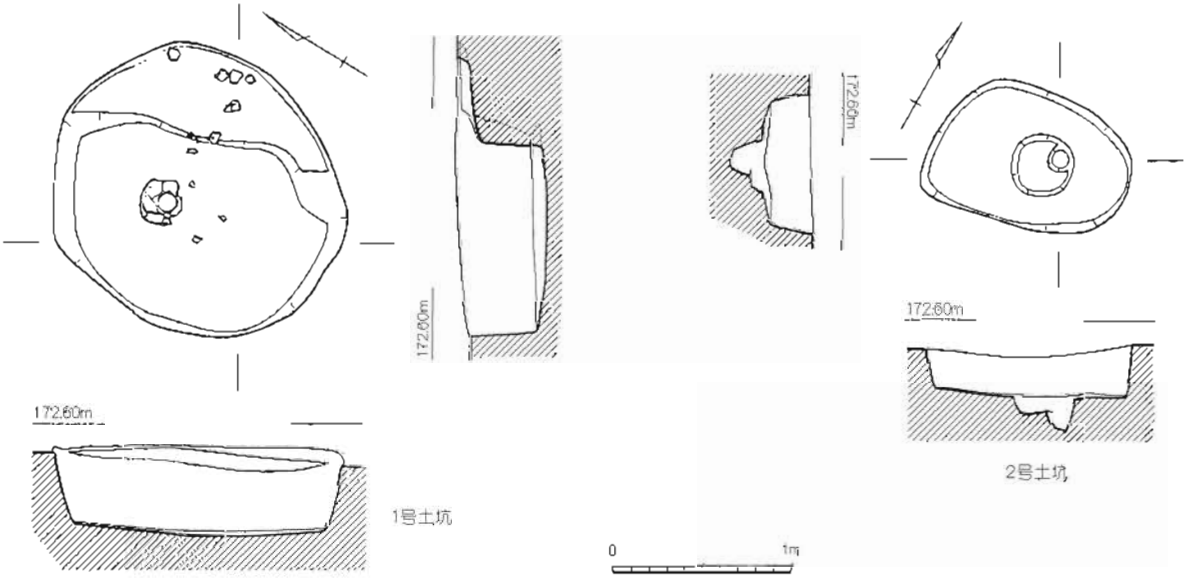
ピット（第３図）

ピットのうちいくつかは木の根によるものと思われるものがある。出土遺物は少なく、Ｐ１・２・４・６・７・８・10・11 からは器小片、Ｐ３・４・９からは剥片が出土している。なお、建物となる柱痕は確認されなかった。

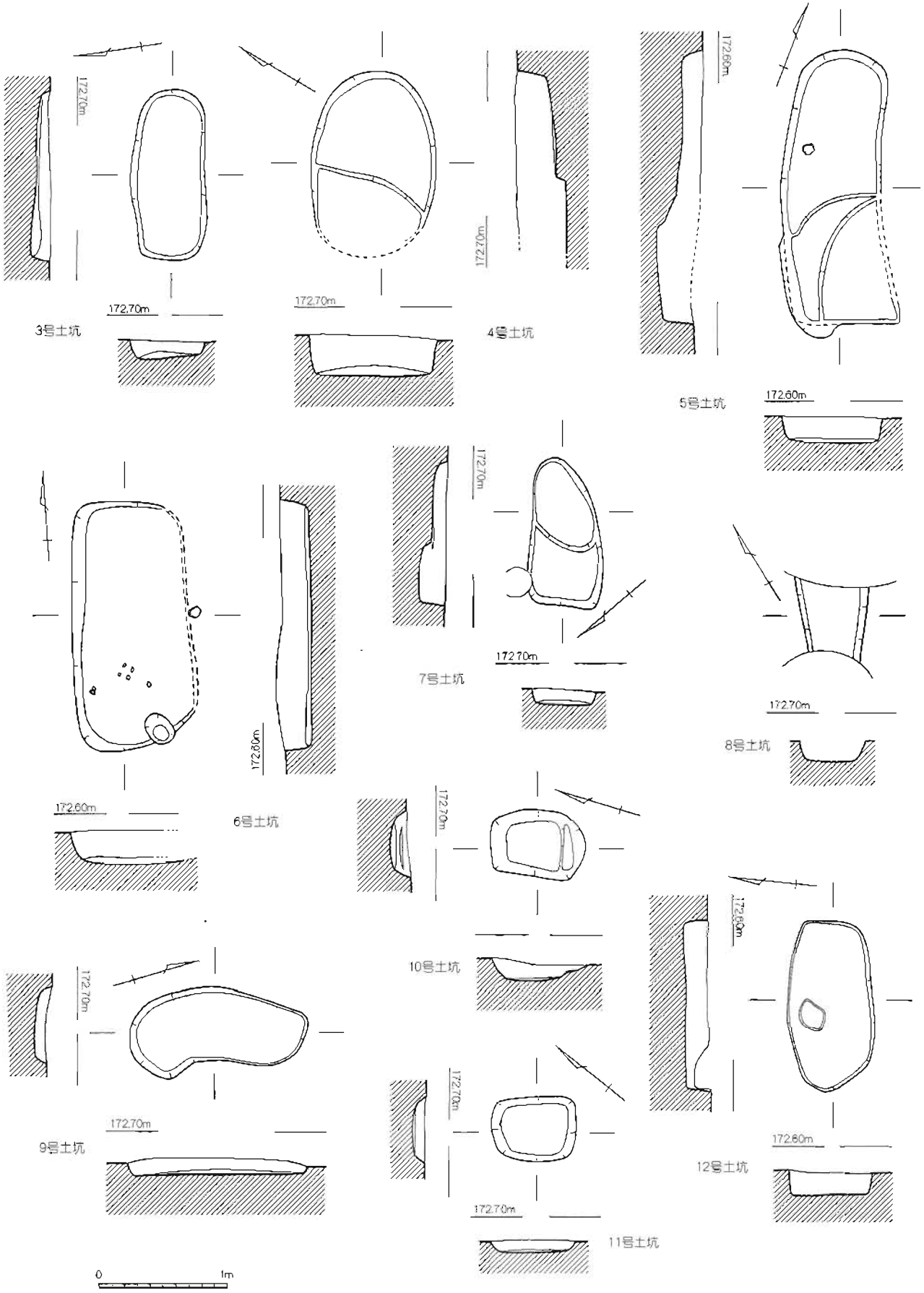
(3) 小結

この調査区では主に土坑を確認した。その時期についてまとめると、１号土坑からは口縁部が逆「L」字状をなす甕に、口縁が朝顔形に開く口縁に肩部と胴部に三角突帯を巡らせる壺が共伴しており、これらの特徴から城ノ越式に相当する。他の 13・17・19 号出土の甕も、１号の甕と類似している点からすれば、同時期とみて差し支えないであろう。このほかの土坑は時期判断できる遺物は出土していないが、他の調査区でみられる縄文土器や中世期の遺物が見当たらないことからすれば、大半は同時期と考えてもよさそうである。

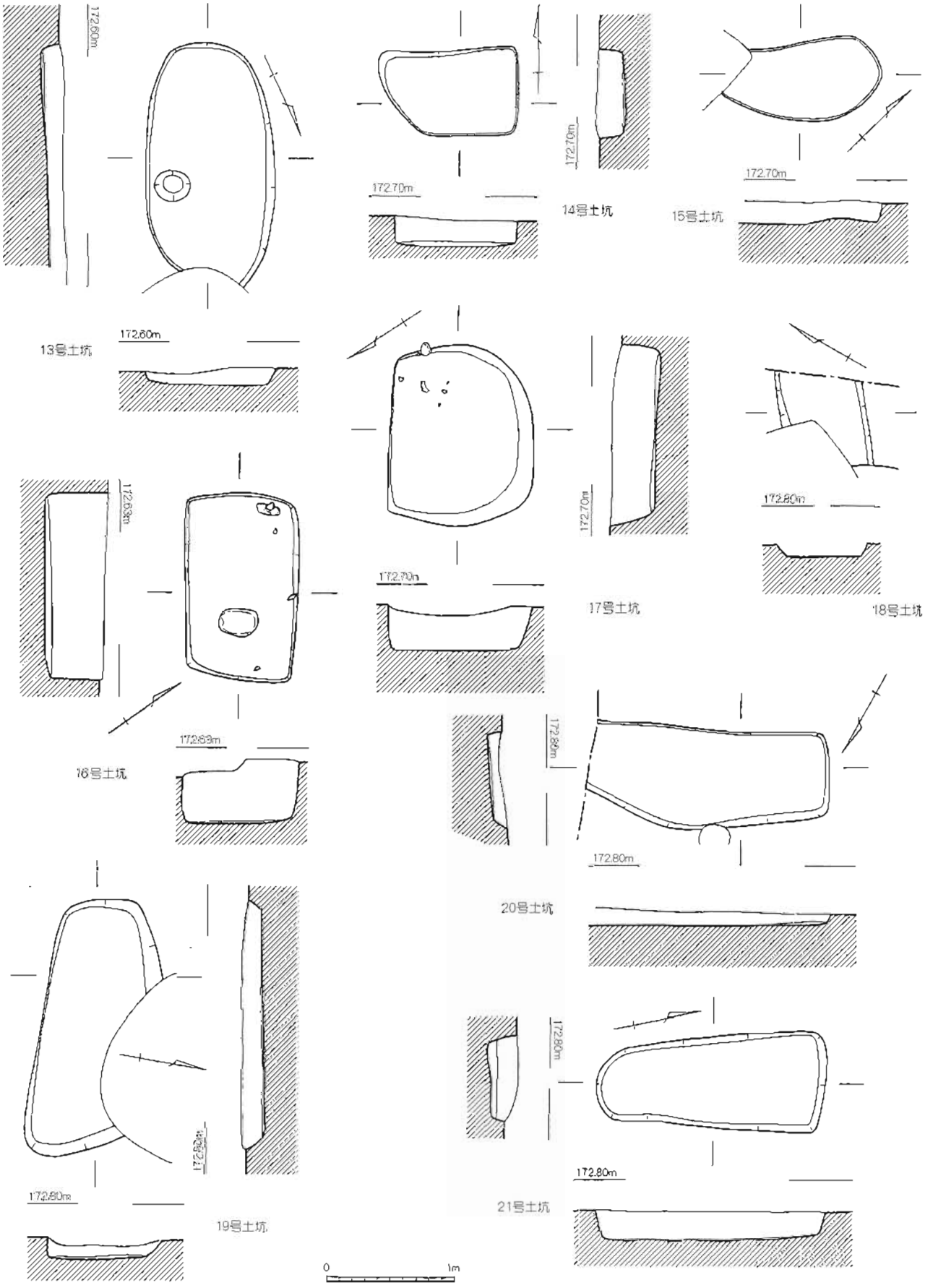
第３図　Ｆ区遺構配置図（1/400）



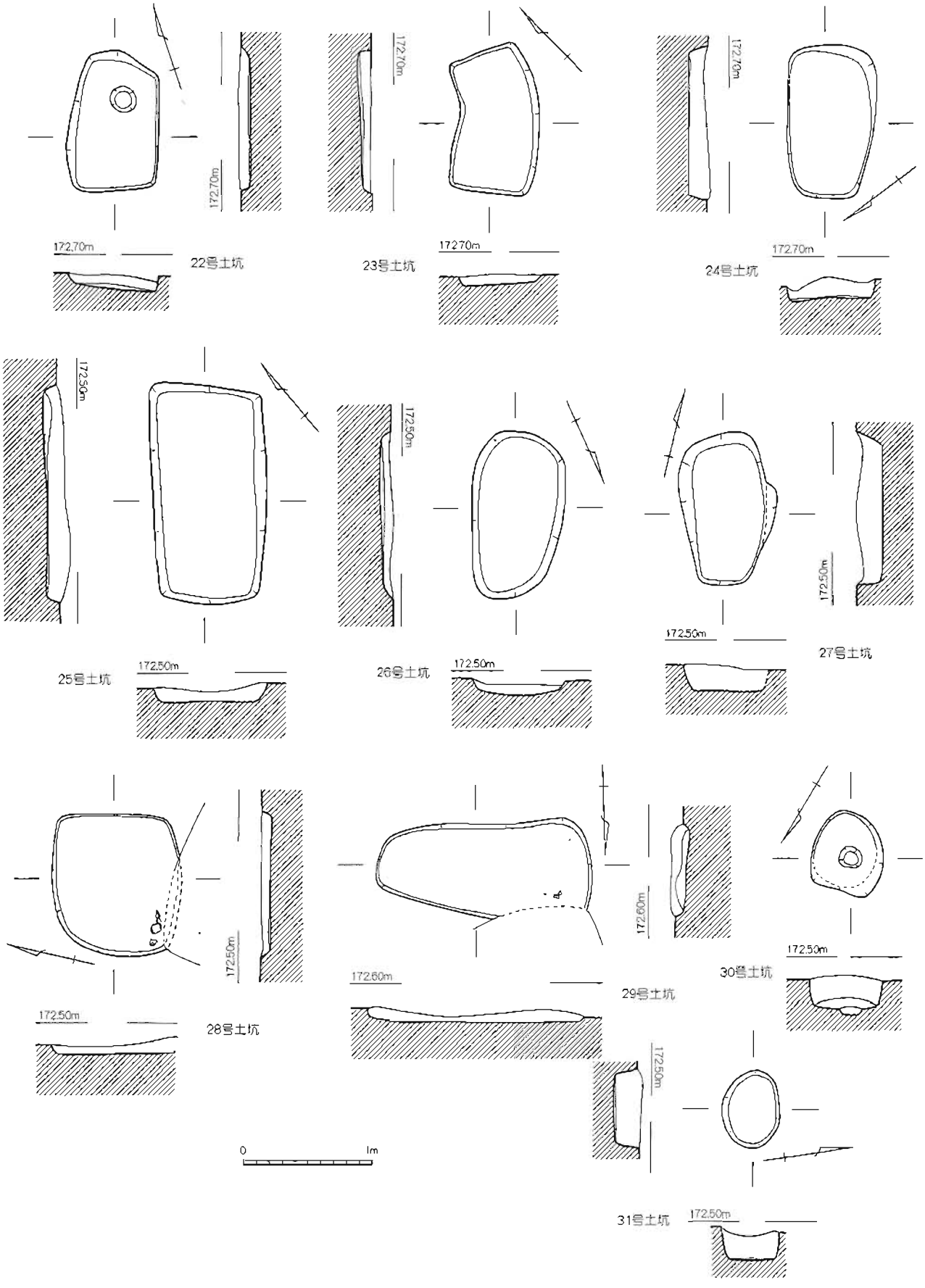
第４図　Ｆ区１・２号土坑実測図（1/40）



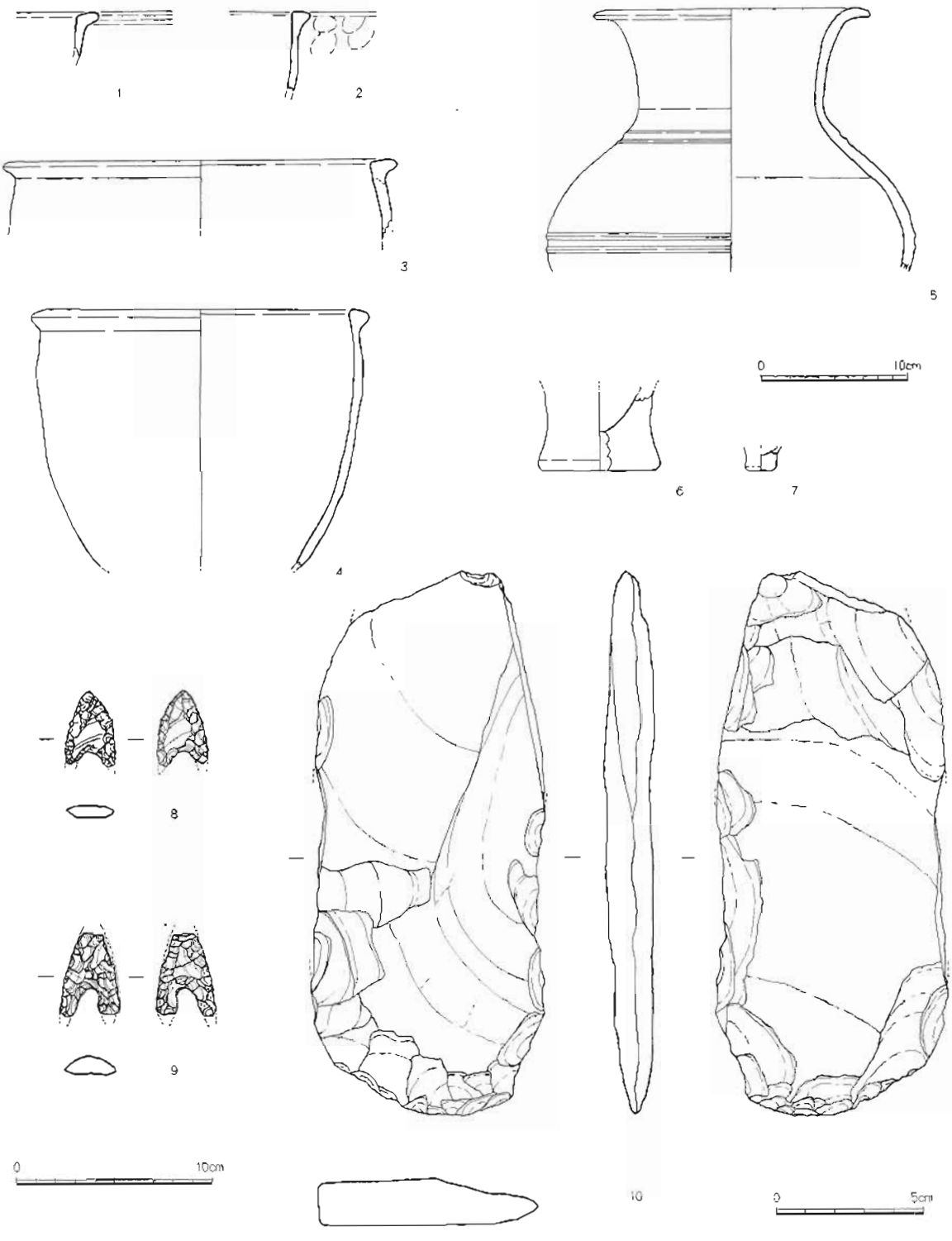
第5図　F区3～12号土坑実測図（1/40）



第 6 図　F 区 13 ～ 21 号土坑実測図 (1/40)



第 7 図　F 区 22 ～ 31 号土坑実測図（1/40）



第８図　Ｆ区土坑出土遺物実測図（1/4・2/3・1/2）

Ⅳ．H区の調査

(1) 調査の概要（第9図）

H区は、調査開始以前は調査区一帯に畑が営まれていた。機械による表土除去作業では約30～50㎝で黄褐色の地山が検出され、弥生時代の遺物とともに各種の遺構が確認された。調査区内での主な遺構の数は全体で竪穴住居3軒、掘立柱建物1棟、土坑10基、溝2条であったが、いずれも削平が著しく、台地上でありながら本来は起伏があったものと想像される。

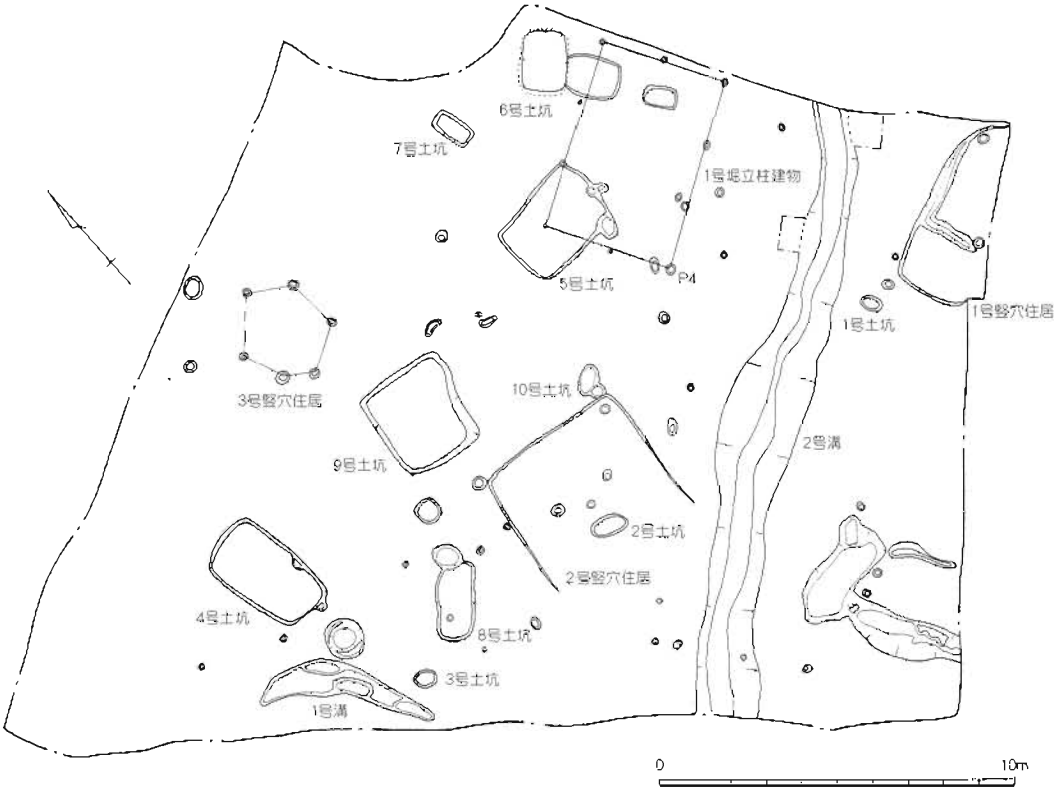
本調査区での発掘調査対象面積は約440㎡である。以下、遺構ごとに説明を加えることにする。

(2) 遺構と遺物

竪穴住居

1号竪穴住居（第10図、写真図版5）

調査区東側隅で検出された平面不定形プランを呈する住居である。住居北側コーナー付近は円形に近いカーブを描いているが、西側コーナー付近はほぼ直角に近い角度で屈曲し、2mほど南からは再び直角に近い角度で屈曲する。住居の内側には住居に伴うと考えられる主柱穴が1カ所検出され、そのそばからは住居壁面に沿って延びる周溝が巡っていた。また、住居の中心よりやや東側の位置には赤褐色に焼成を受けた炉跡が検出された。当初、遺構検出面での形状から2基の住居の切り合いを想定していたが、埋土に明確な切り合い状況が確認できなかったこと、また周溝の



第9図　H区遺構配置図（1/200）

あり方や遺物の出土状況からも切り合いとしては考えがたいことから1軒の住居と判断した。その場合、住居を区切る位置にある周溝部分より西側については、東側とレベル高がほぼ等しいことからベッド状遺構ではなく、何らかの付帯施設と思われる。住居の最大長は約5.3m、内部を区切る周溝より東側の壁面までの距離は約3.4mを測る。周溝の幅は約30cm、また炉跡の大きさは約50cm、深さ約3cmを測る。住居内からはまとまって遺物が出土した。

出土遺物（第17・18図、写真図版6）

1～13は弥生土器で、1～12は甕、13は壺である。1は口縁部で断面「逆L字状」を呈する。胴部は口縁部まで直線的に延びる。2は底部で、1と同一個体と考えられる。底面は小ぶりでやや上底状を呈する。3は口縁部で端部は断面「逆三角形状」を呈する。口縁部下に1条沈線が施される。胴部は1と比較しやや膨らむ。4は底部で、3と同一個体と考えられる。底面は2と比較し大きく、やや上げ底を呈する。5は口縁部で端部は断面「如意状」を呈する。胴部は3と同様やや膨らむタイプである。6は口縁部で端部は断面「逆三角形状」を呈する。7は厚手の底部で上底状を呈する。8も7と同様の底部である。9はレンズ状を呈するミニチュア土器の底部である。10～12も厚手の底部である。13はやや分厚い壺の底部で胴部は大きく膨らむ。24は2次加工剥片である。黒曜石製。

2号竪穴住居（第17・18図、写真図版5）

調査区中央で検出された平面方形プランを呈する住居である。住居の南側は削平を受けている。住居の内側には主柱穴と考えられるピットが2カ所検出された。またこの住居からは炉跡と見られる痕跡は確認できなかった。しかし、1号土坑からは炭・焼土が多量に検出されたことから、これが炉跡であった可能性もある。住居の最大長は壁面が残存している東西方向で約4.5m、深さは最大で約20cmを測る。この住居からは、わずかに遺物が出土したが図示するには至らなかった。

3号竪穴住居（第12図、写真図版5）

調査区西側で検出された住居で、壁面等はほとんど削平され主柱穴のみが残る。主柱穴はいずれも深くしっかりしている。主柱穴の数等から円形住居であったことが推測される。この主柱穴からはわずかに遺物が出土したが、図示するには至らなかった。

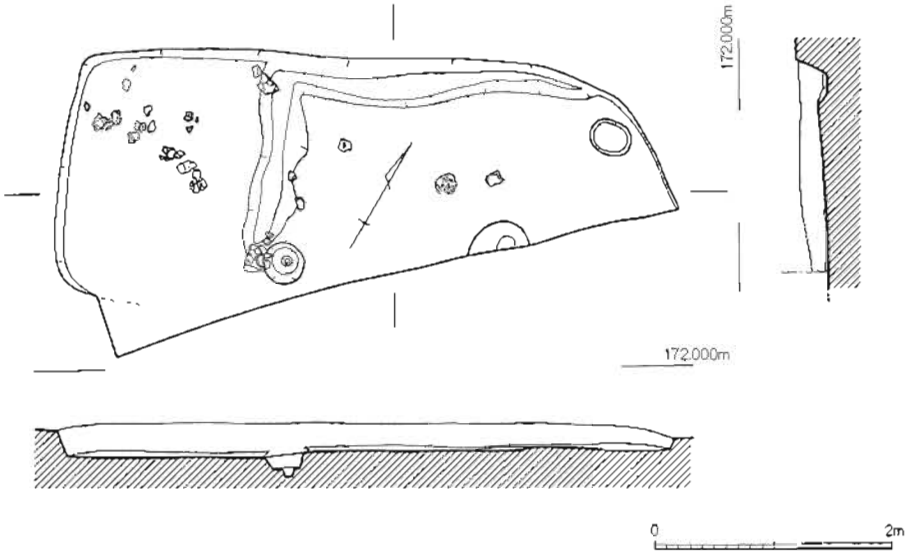
掘立柱建物

1号掘立柱建物（第13図）

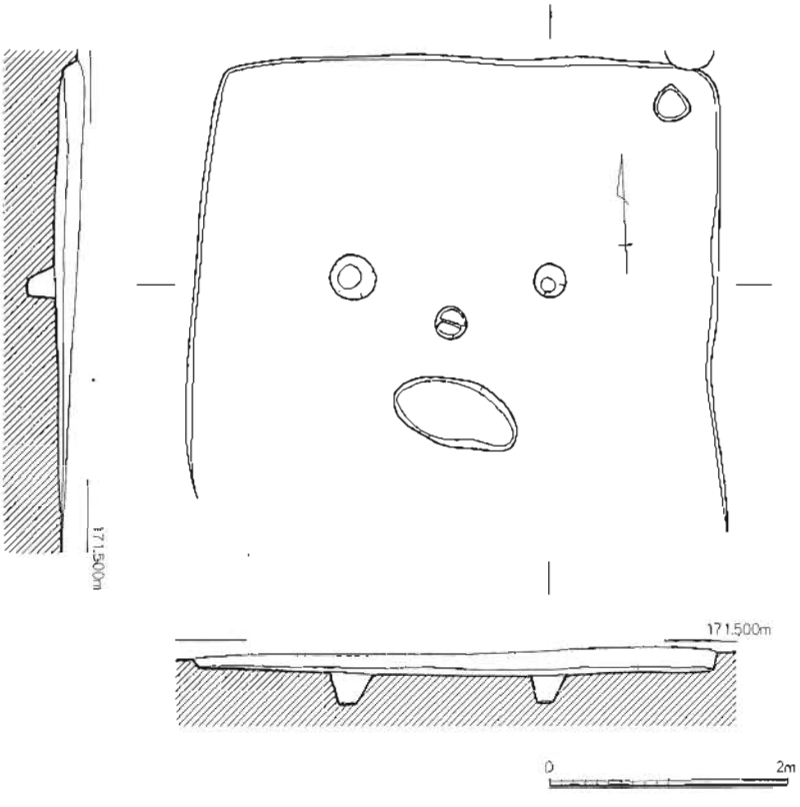
調査区西側で検出された建物である。2間（約3.7m）×3間（約5.4m）の東西棟の建物で、柱間平均は梁間約1.8m、桁行約1.8mを測る。柱穴の掘り方は確認面で直径約10cm～30cm、深さは約5cm～35cmを測る。建物の軸方位はN－34°－Eを測る。建物柱穴からの出土遺物はなかった。

土坑（第14～16図、写真図版5）

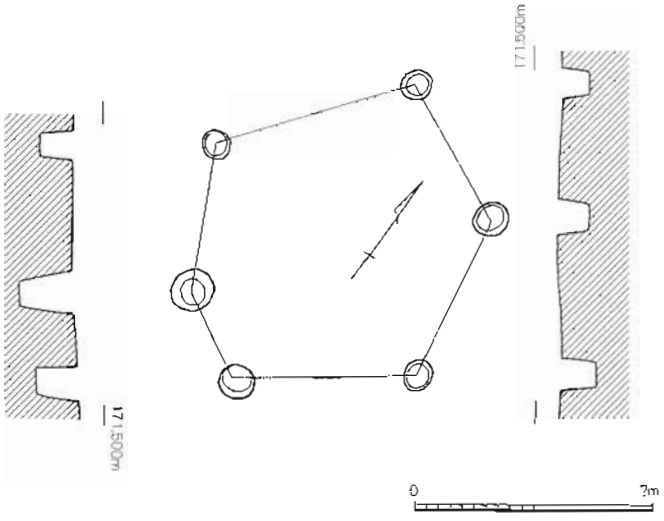
土坑は全部で10基検出された。このうち1号土坑は2号竪穴住居内で検出されており、住居の付属遺構の可能性もある。また、4・5・9号土坑はいずれも隅丸方形プランを呈し、掘り方もしっかりしている。中からはいずれも遺物が出土しており、墓穴の可能性もある。とくに5号からは完形の甕が内部から出土した。6号土坑は平面隅丸長方形プラン、断面フラスコ状を呈することから貯蔵穴の可能性が高い。その他の土坑については、遺構の平面形も不定形であり、深さも浅く、用途については不明である。



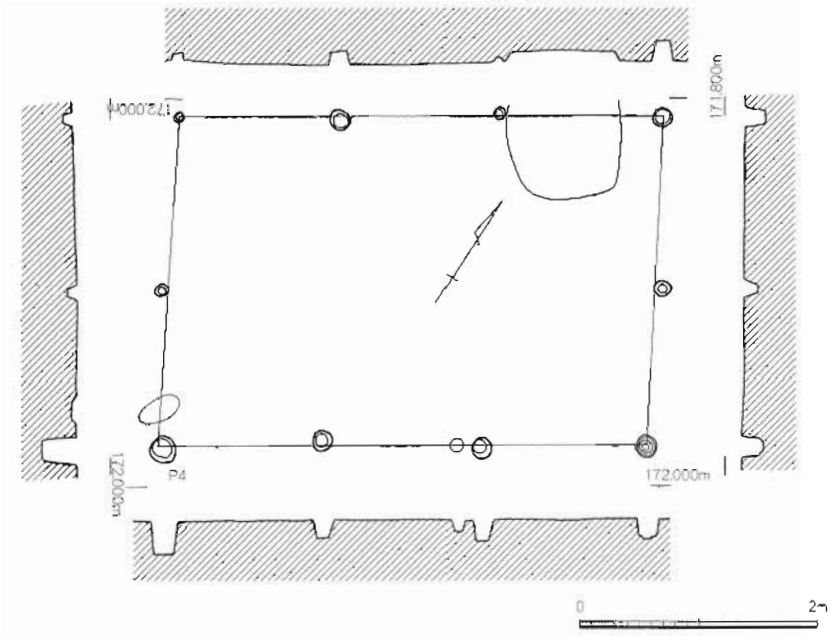
第 10 図　H区 1 号竪穴住居実測図 (1/60)



第 11 図　H区 2 号竪穴住居実測図 (1/60)



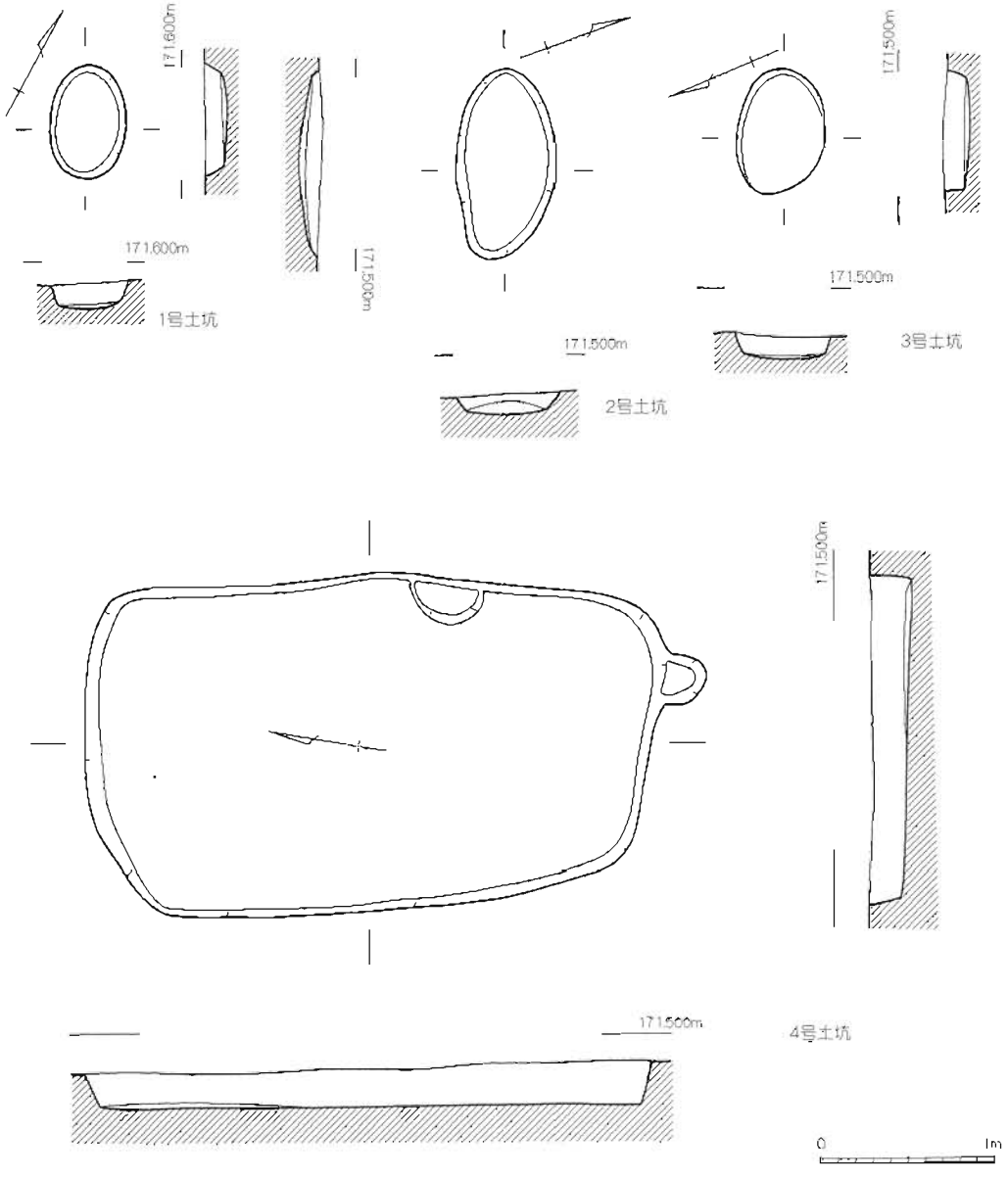
第 12 図　H区 3 号竪穴住居実測図 (1/60)



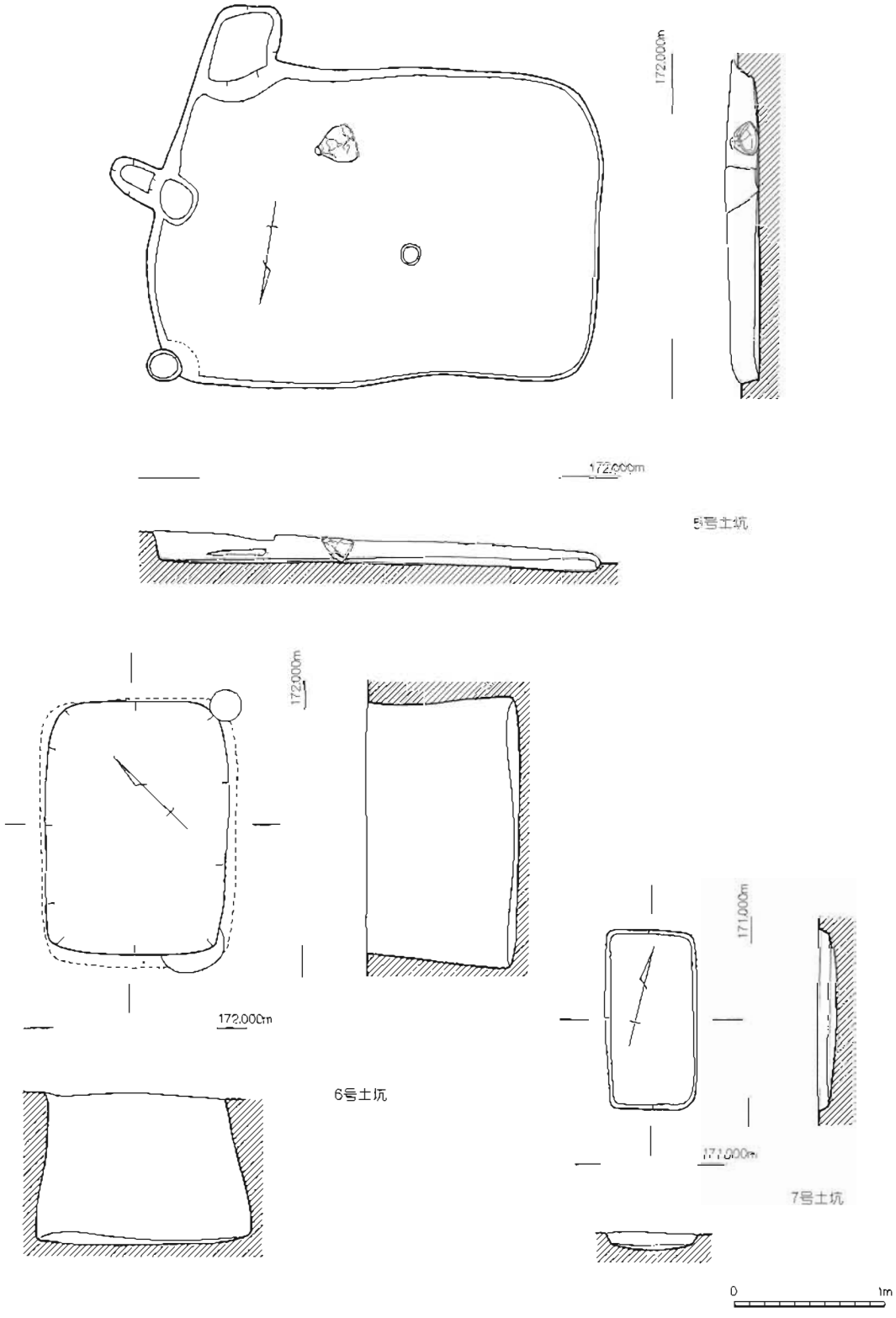
第 13 図　H区 1 号掘立柱建物実測図 (1/60)

出土遺物（第17・18図、写真図版6）

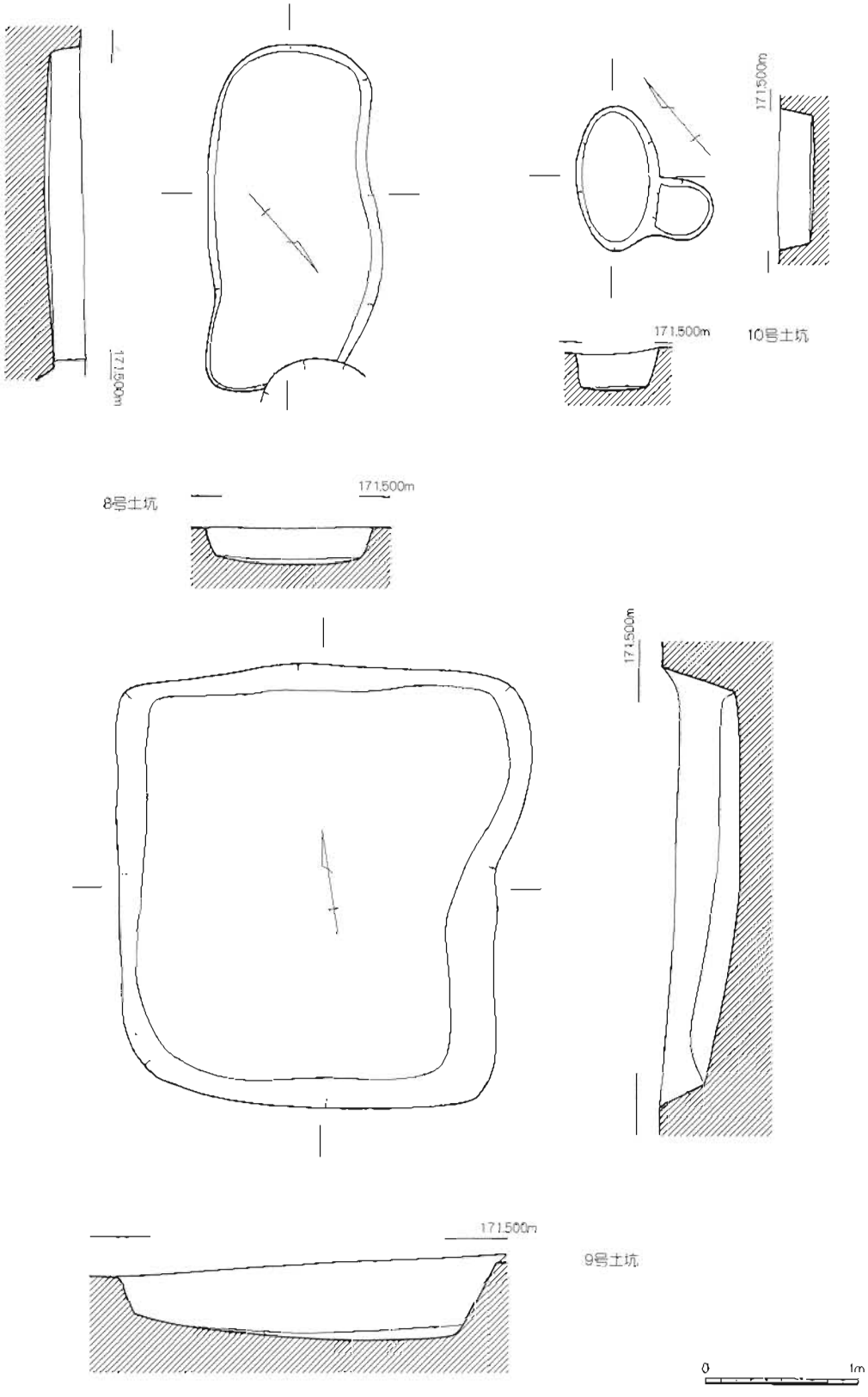
14は弥生土器甕の完形品である。口縁部は「如意状」を呈し、胴部はやや膨らむ。底部は厚くやや上げ底となっている。胴部外面は2次焼成を受け、赤褐色を呈する。15は縄文土器深鉢の口縁部片である。5号土坑出土。16は弥生土器甕口縁部である。断面「逆L字状」を呈する。17は縄文土器深鉢口縁部片である。口縁部は「くの字状」を呈する。6号土坑出土。18は縄文土器鉢の底部片である。10号土坑出土。19～21は石鏃である。19は6号、20は4号、21は8号土坑出土。22～23・25は2次加工剥片である。22は6号、23・25は9号土坑出土。27は打製石斧である。6号土坑出土。



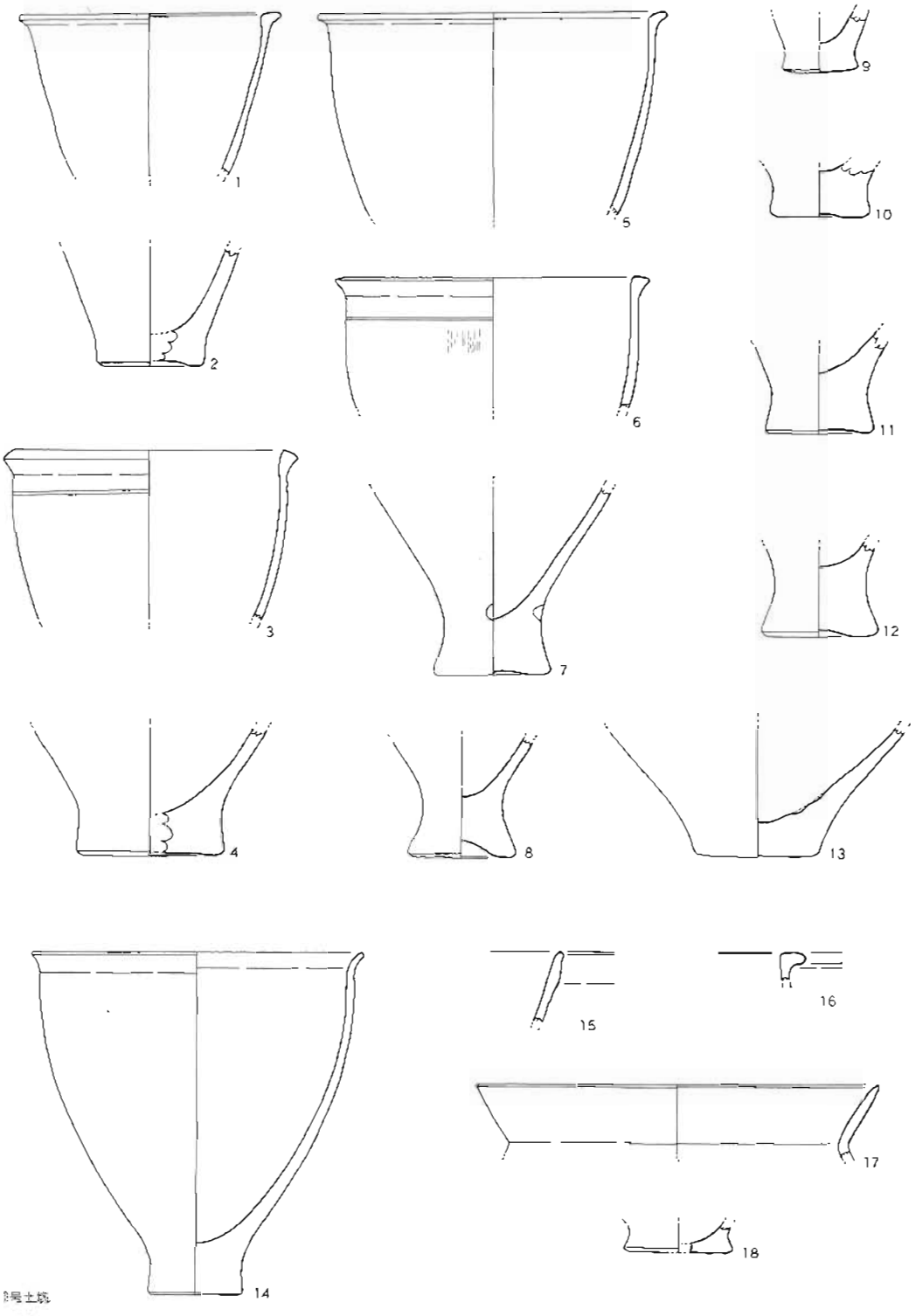
第14図　H区1～4号土坑実測図（1/40）



第 15 図　H区 5 ～ 7 号土坑実測図 (1/40)

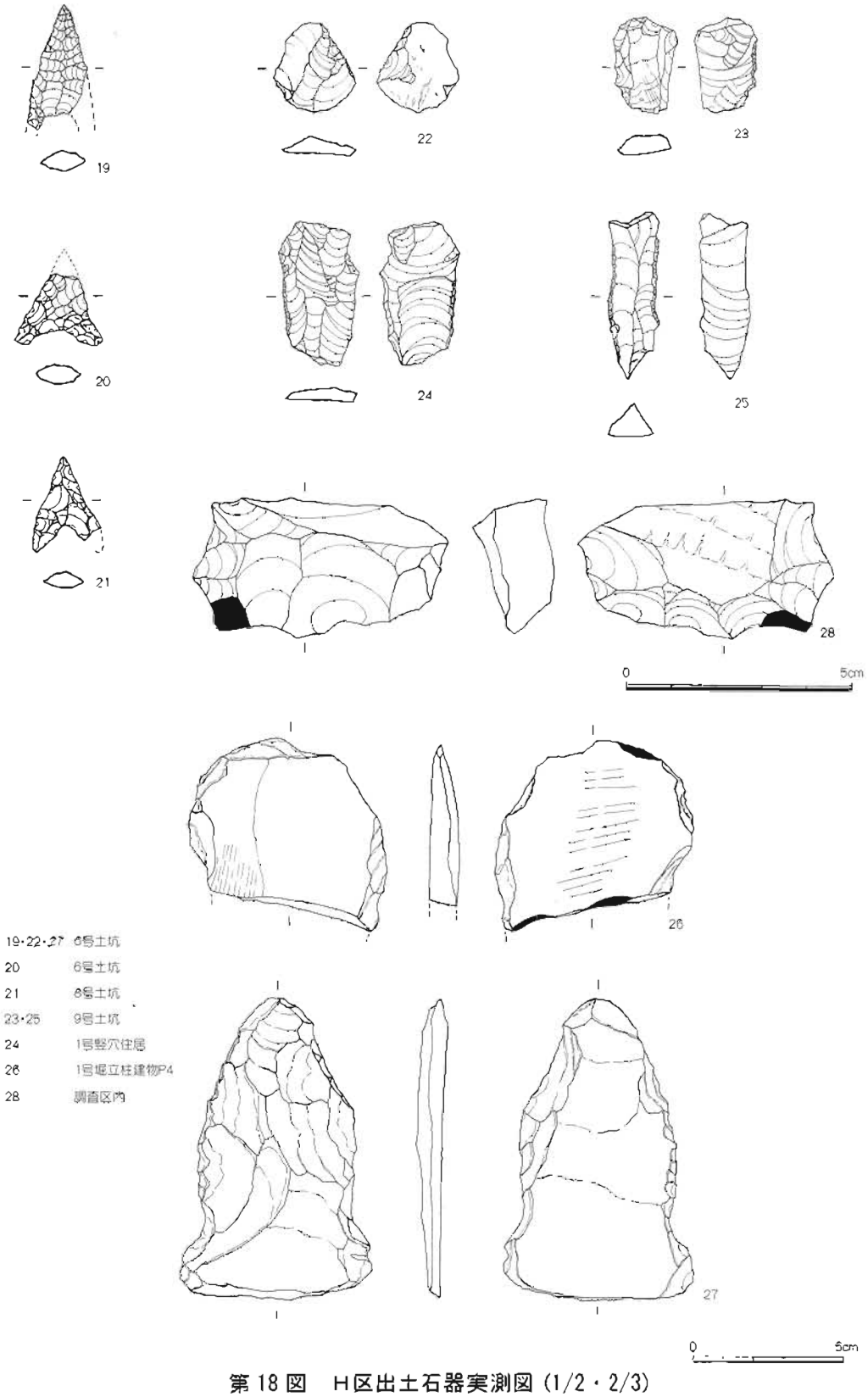


第 16 図　H区 8 ～ 10 号土坑実測図 (1/40)



1～13　8号土坑
14·15　5号土坑
16·17　6号土坑
18　10号土坑

第17図　H区出土土器実測図 (1/4)



19・22・27　6号土坑
20　6号土坑
21　6号土坑
23・25　9号土坑
24　1号竪穴住居
26　1号堀立柱建物P4
28　調査区内

第 18 図　H区出土石器実測図 (1/2・2/3)

溝

1 号溝（第 9 図）

この溝は調査区南端で検出された。溝の長さ約 4.8 m、最大幅約 1.1 m、深さ約 0.6 mを測る。この溝からの出土遺物はなく、風倒木痕の可能性もある。

2 号溝（第 9 図）

この溝は調査区を南北に縦断するように検出された。確認面での溝の長さ約 17.3 m、最大幅約　2.1 m、深さ約 0.25 mを測る。この溝からは遺物が少量検出されたが図示するには至らなかった。

その他の遺物（第 18 図、写真図版 6）

26 は P4 から出土した打製石斧片である。安山岩製。28 は調査区内より出土した石核である。サヌカイト製。

(3) 小結

これまで見てきたように、調査区からは竪穴住居をはじめ、各種の遺構や遺物が検出された。ここではこれらの遺構の時期について整理してみることにしたい。竪穴住居は全部で 3 軒検出されたが、このうち明確な時期を示す遺物が伴っているのは 1 号竪穴住居のみである。この住居からは如意形や城ノ越タイプの特徴を持つ甕がまとまって出土しており、時期としては弥生時代前期末から中期初頭と考えられる。土坑では 5 号から如意形の口縁部の特徴を持つ甕や 6 号でも「逆Ｌ字状」を呈する口縁部が出土しており、5 号は弥生時代前期末から中期初頭、6 号は中期初頭から前半の時期の範疇で収まるものと考えられる。これ以外の遺物として、縄文時代の鉢が 5 号・6 号・10 号よりそれぞれ出土している。特徴から縄文時代晩期前半頃と推測される。

これまでの葛原台地での調査では、弥生時代の遺構は確認されていなかったが、今回調査ではじめてこの時期の遺構が確認された。調査区は台地西端の見晴らしのよい場所であり、眼下には弥生時代後期の環濠集落が発見された三和教田遺跡Ｂ地点や同じく弥生時代前期から中期にかけての土坑群が発見された三和教田遺跡Ａ地点などがある。吹上台地で発見された吹上遺跡や辻原台地で発見された小迫辻原遺跡などは台地下の沖積地上でも同時期の集落の存在が確認されおり、台地と沖積地とで何らかの関係性をもちながら展開していった日田地域の集落立地の特性がうかがわれた。

Ⅴ．Ⅰ区の調査

（1）調査の概要（第19図）

Ⅰ区は、葛原台地の東端、舌状に張り出した尾根上に位置している。調査では後期旧石器時代・縄文時代早期・同後期の多量の遺物とともに竪穴遺構や土坑などの遺構が確認された。

調査面積は約3,000㎡、調査範囲内の標高は約174～179mである。以下、遺構ごとに説明を加えることにする。

（2）遺構と遺物

竪穴遺構（第20図　図版7）

竪穴遺構は調査区の南端において検出された。遺構の西側は削平を受けていたのか、全体のプランは確認出来なかった。残った部分から推測するとやや歪な隅丸方形ないしは円形のプランが考えられようか。なお、遺構内の東南よりには方形プランの一段低い部分があり二段掘りとなっている。遺構内からは、多くの縄文土器や石器が出土している。

出土遺物（第21・22図　図版8・9）

1～12は浅鉢形土器である。1～7は口縁部片である。1～4の口縁部内面には1条の沈線を巡らしている。さらに2・3には沈線の上位に細線羽状文が施されている。5・6には外傾する口縁部を内側にやや屈曲させ口縁帯が形成されている。5のそこには浅い沈線を2条巡らしている。7は外反する口縁部片である。8～10は胴部片である。8には2条の凹線間とその下に細線羽状文がみられる。9・10ともに2条の凹線と凹文が施されている。凹文はいずれも2つの凹点によるものであるが、9の下位の凹点には垂下する凹文が付けられている。11は口縁から胴部にかけてのものである。胴部屈曲部の上位には3条の凹線と2つの凹点による凹文が施されている。やや外反する口縁部の内面には凹線を1条巡らしている。なお、内面には赤色顔料の付着がみられる。12はやや内湾気味に真っ直ぐのびる胴部から、口縁が僅かに外傾気味に立ち上がるものである。口縁部には2条の凹線を巡らしている。

13～24は深鉢形土器である。13～20は口縁部片である。13～17の口縁部内面には1条の沈線を巡らしている。20には焼成後の穿孔がみられる。21・22は胴部片である。21の外面には凹線状に窪ませたラインにヘラ状工具を当てて施されたような連点がみられる。細線羽状文を模した（意識した）ものであろうか。22の胴部屈曲部の上位には3条の凹線を巡らしている。23・24は口縁から胴部にかけてのものである。23は口縁部内面に1条の沈線を巡らしている。器形的には緩く張る胴部から僅かに窄まる頸部を介して緩く外反する口縁部へとつづくものである。24には胴部の張りはあまりみられず、僅かに窄まる頸部より外傾する口縁部が大きく形作られている。

25～28は底部片である。いずれも上げ底になるものである。

29は石鏃である。基部に抉入のある凹基無茎鏃である。石材は結晶片岩とみられる。

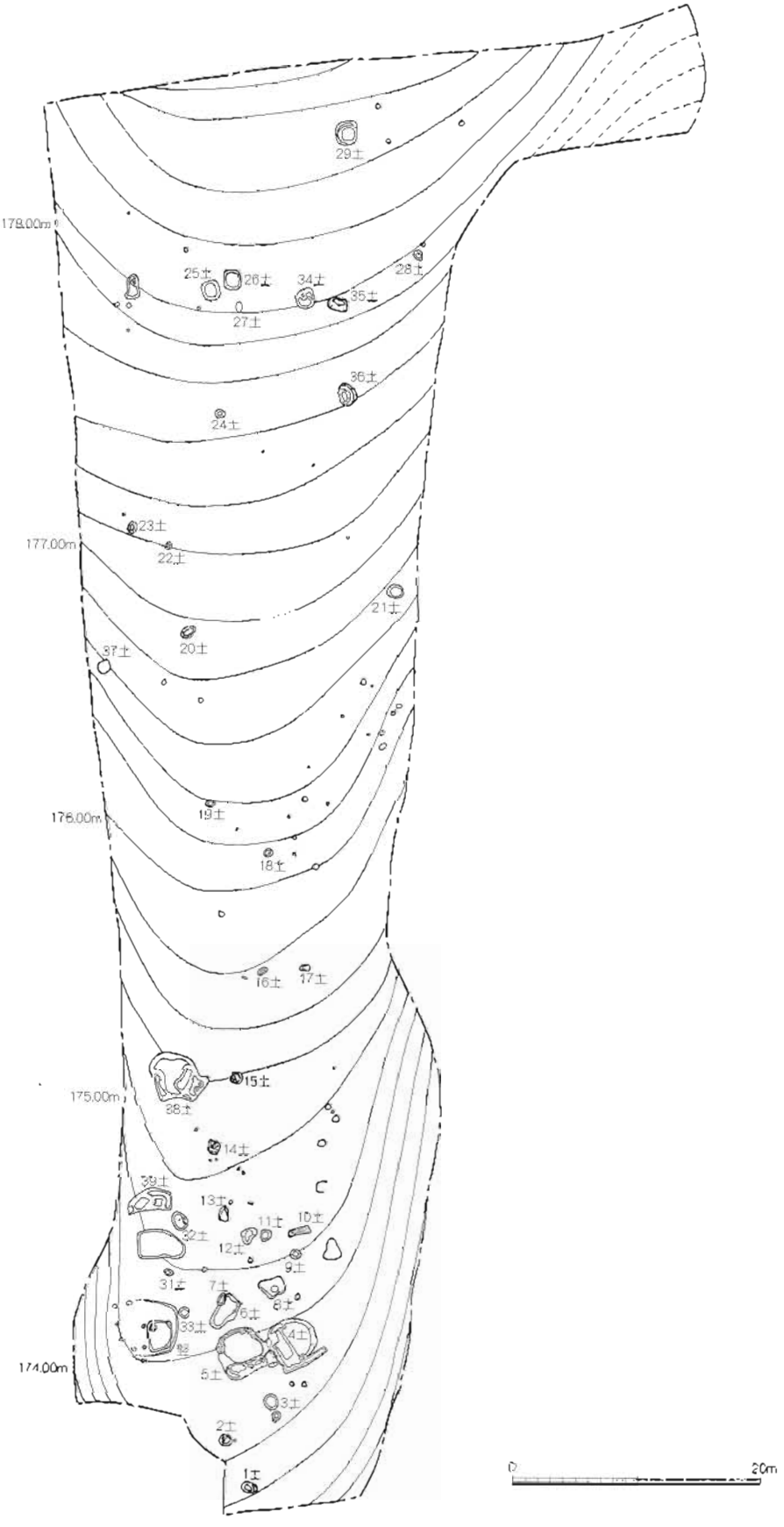
30は腰岳系黒曜石製のスクレイパーである。

31は姫島産黒曜石製の二次加工剥片である。両縁縁を中心に二次加工がみられる。

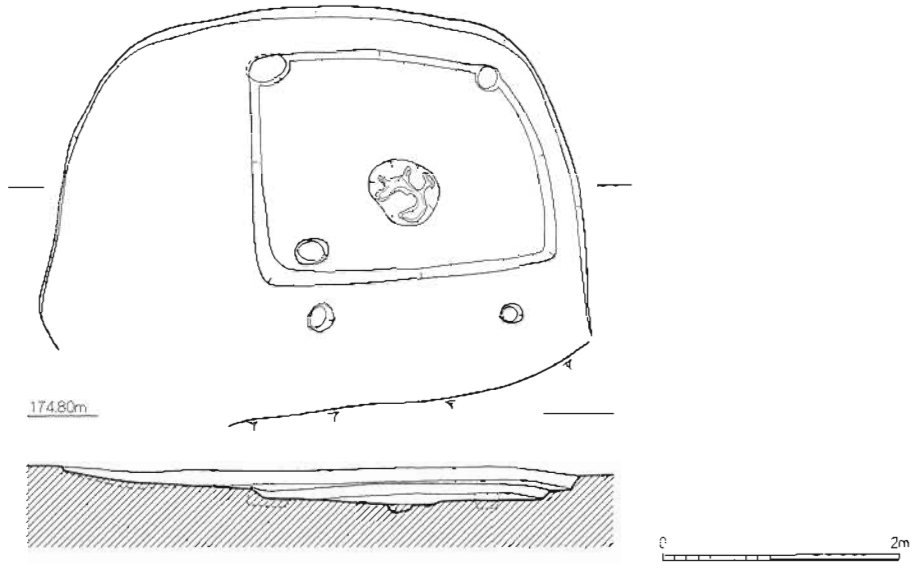
32・33は腰岳系黒曜石製の使用痕剥片である。

土坑（第23～26図　図版7）

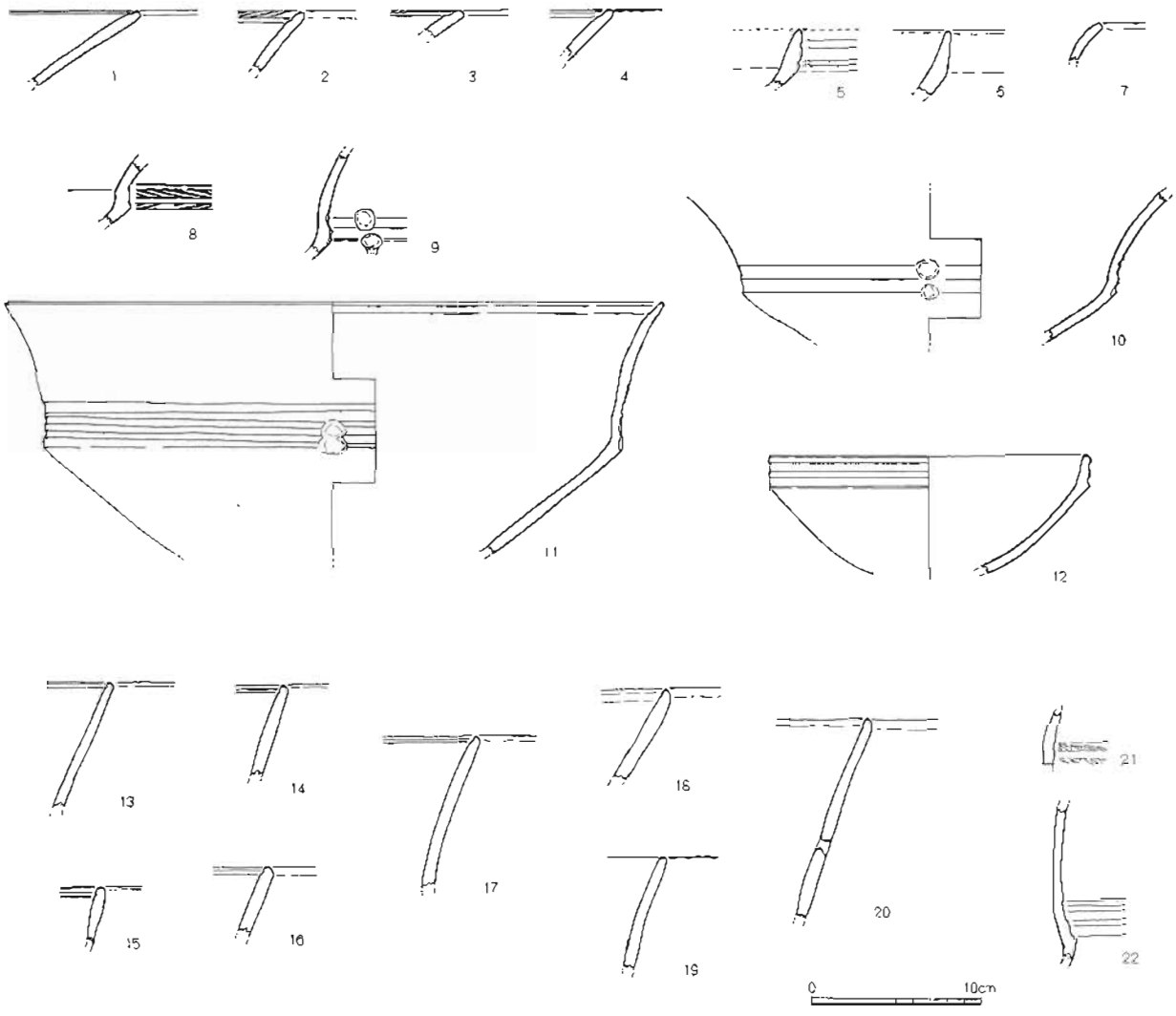
調査では41基の土坑が確認されている。それらの平面プランは円形・楕円形・長楕円形・方形・隅丸方形・不整形をなしており、深さも20cmから1mを超えるものもある。このように規模・形態はまちまちである。これら土坑のうちの半分ぐらいから遺物が出土している。以下に、各土坑からどういったものが出土しているか記すこ



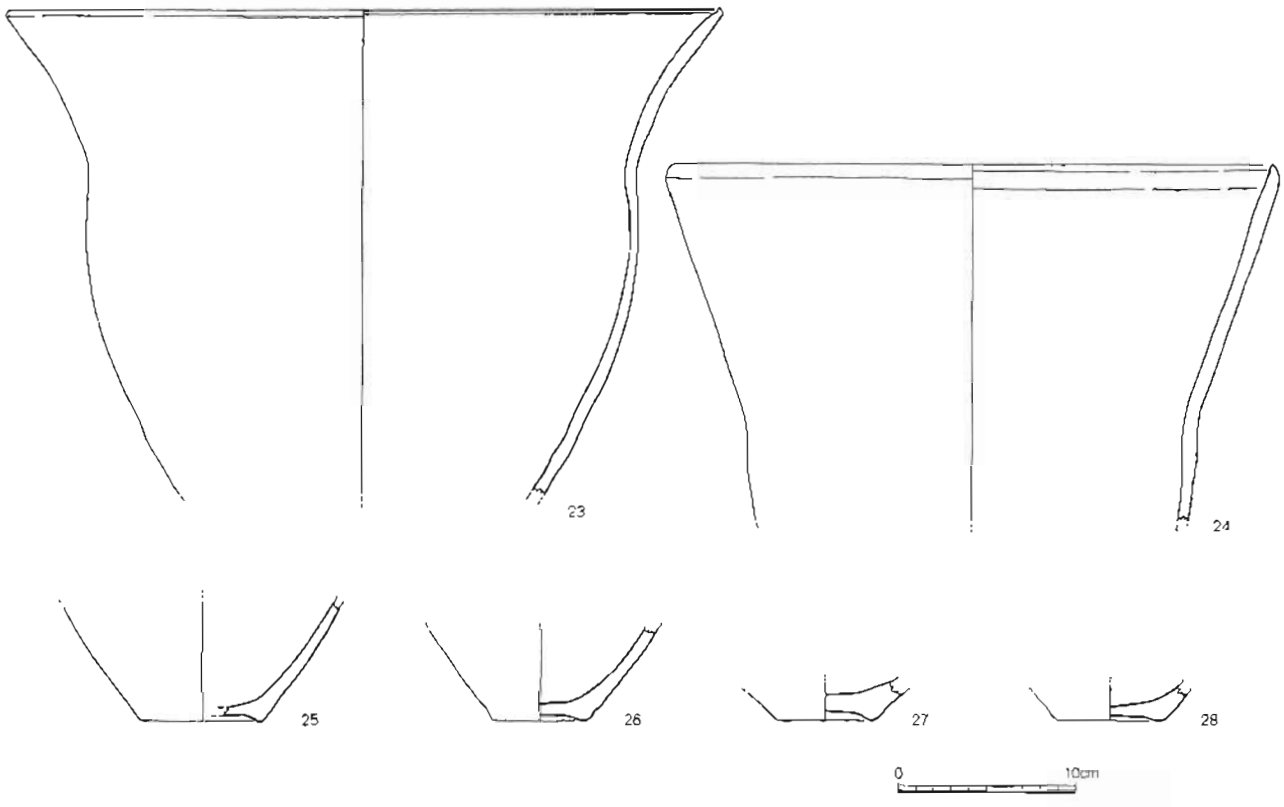
第 19 図　　I 区遺構配置図（1/500）

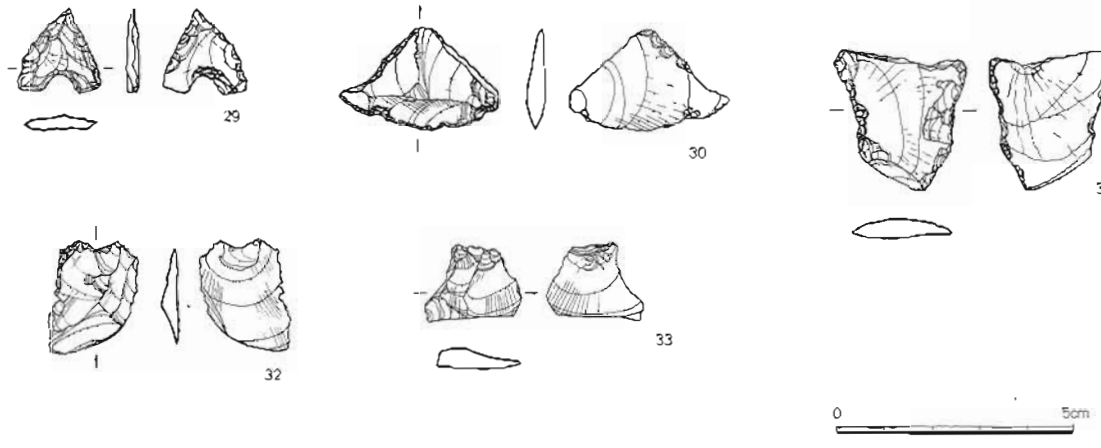


第 20 図　　Ⅰ区竪穴遺構実測図（１/60）



第 21 図　　Ⅰ区竪穴遺構出土遺物実測図１（１/ ４）

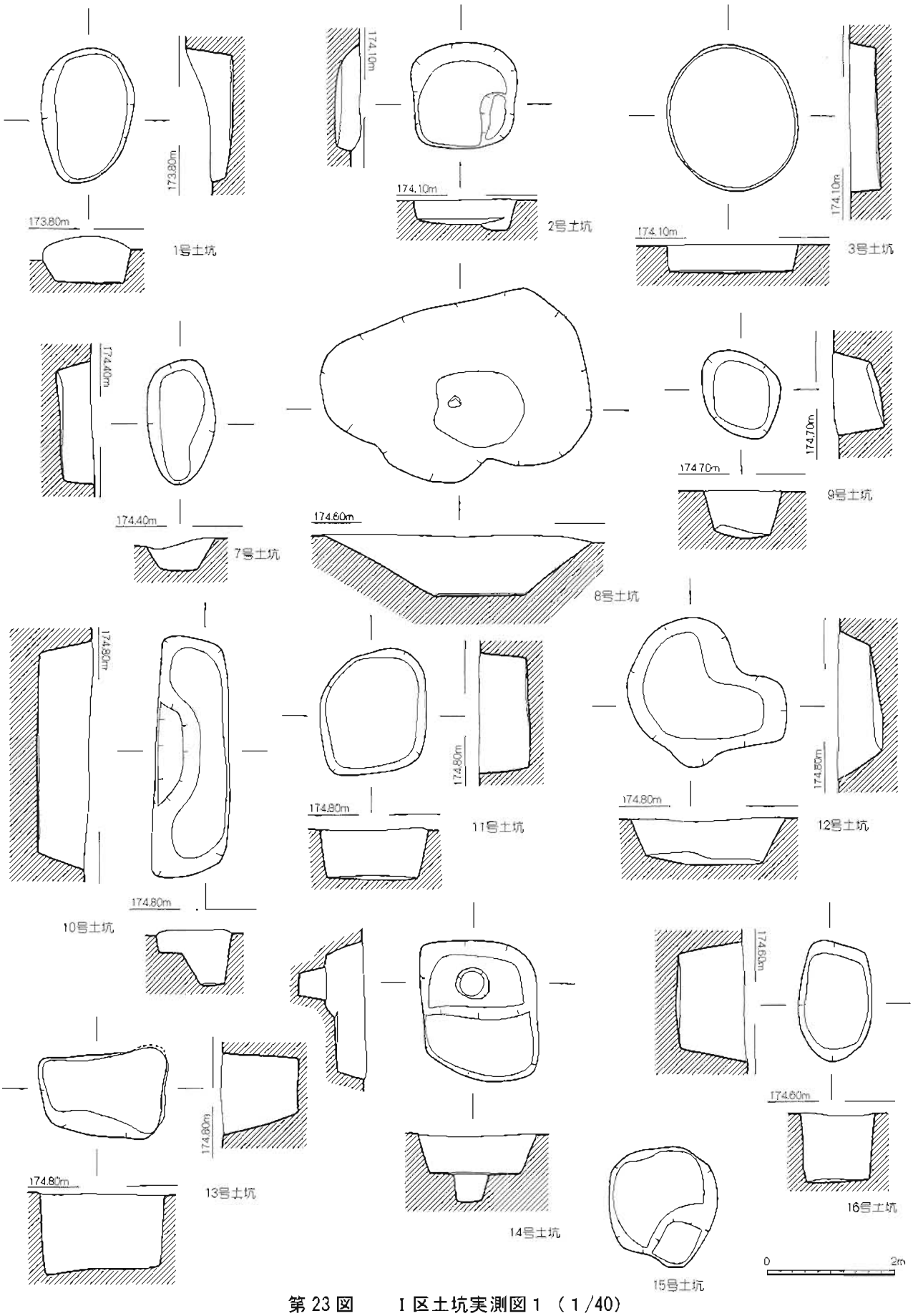




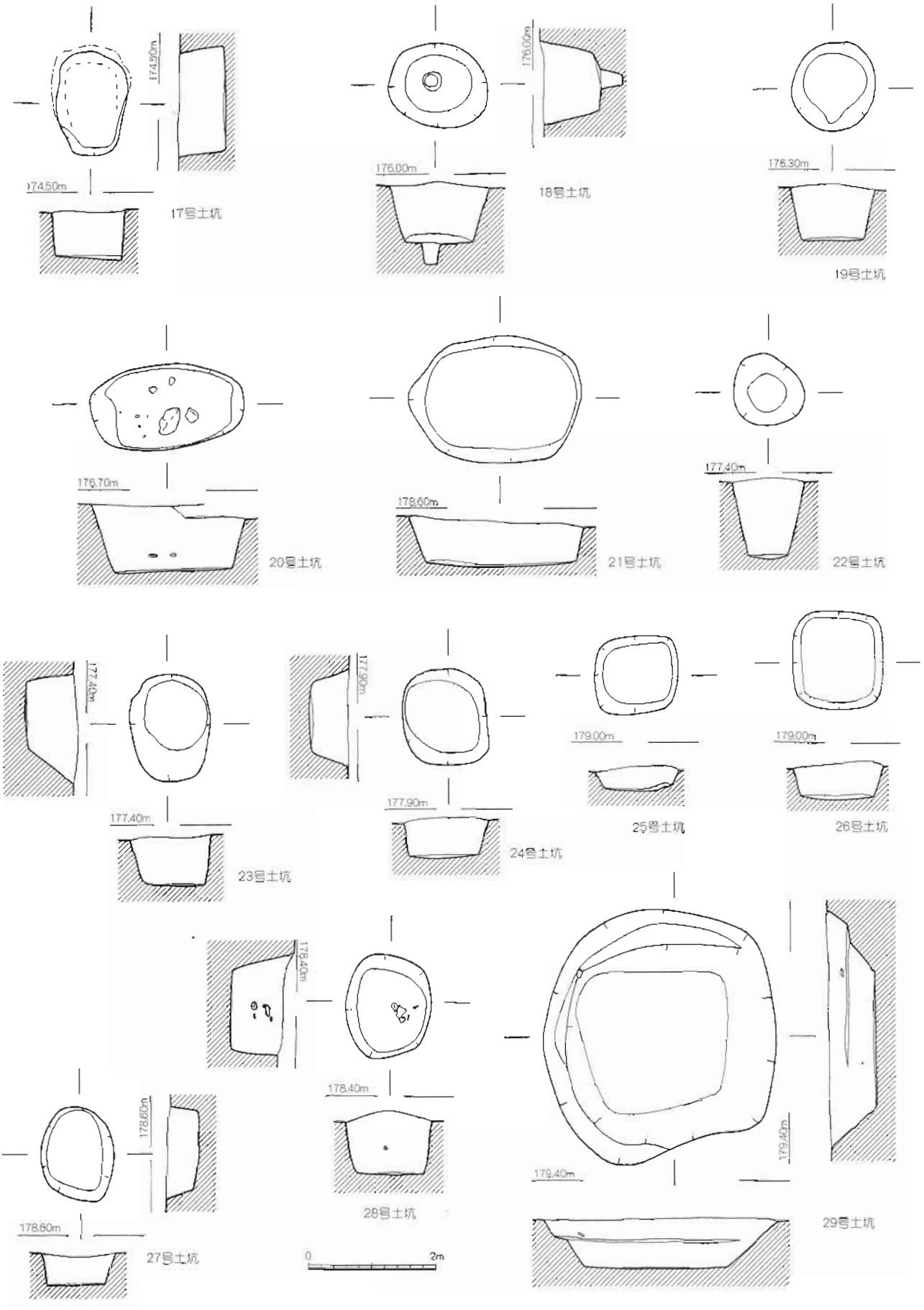
第 22 図　　I 区竪穴遺構出土遺物実測図 2 （1／4・2／3）

ととする。

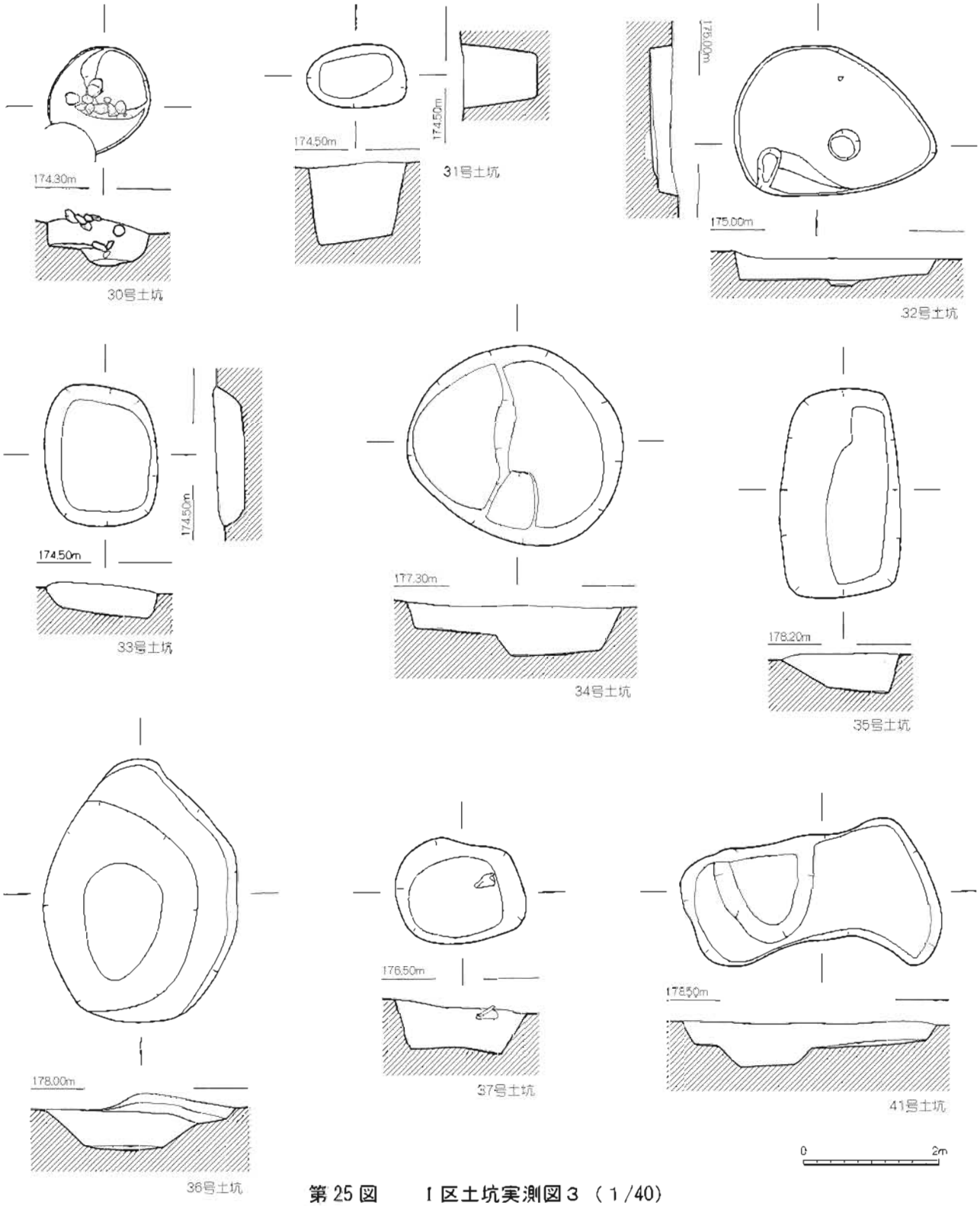
4 号土坑からは縄文土器と腰岳系黒曜石やサヌカイト製の石器。5 号土坑からは縄文時代後・晩期の所産とみられる土器とともに磨製石斧や腰岳系黒曜石製の石器。6 号土坑からは腰岳系黒曜石やサヌカイト製の石器。15 号土坑からは腰岳系黒曜石製の石器。20 号土坑からは縄文土器とみられる小片と腰岳系黒曜石製の石鏃などの石器類。21 号土坑からは腰岳系黒曜石製の石器が十数点。22 号土坑からは縄文土器とみられる小片と珪質岩とみられる石鏃や腰岳系黒曜石製の石器。24・25 号土坑からは腰岳系黒曜石製の石器。26 号土坑からは 20 点近くの腰



第 23 図　　I 区土坑実測図 1 （1/40）

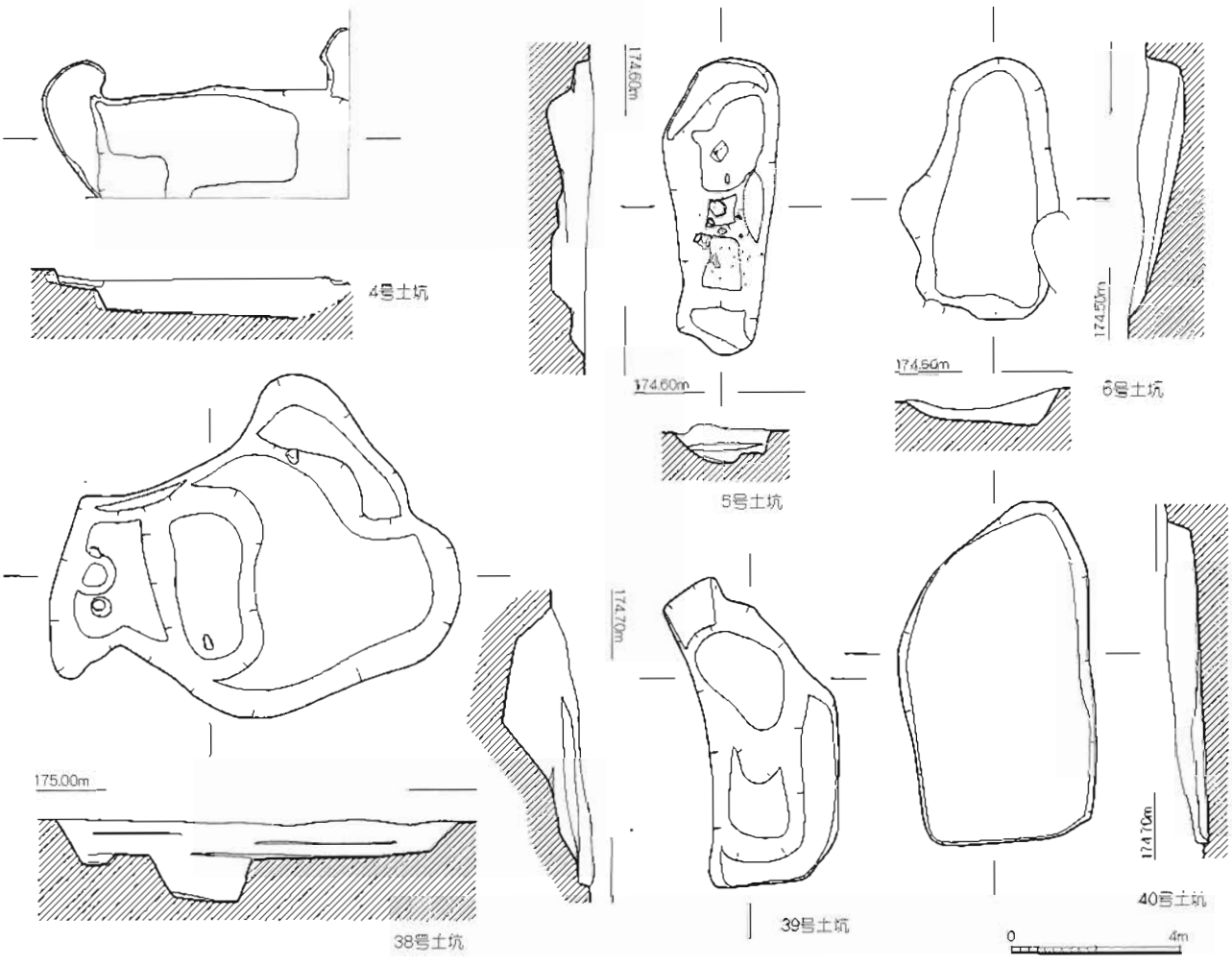


第 24 図　　Ⅰ区土坑実測図２（１/40）



第 25 図　　I 区土坑実測図 3 （1/40）

岳系黒曜石製石器と珪質岩や玻璃質安山岩・サヌカイト製の石器，28 号土坑は縄文後期後葉の所産とみられる土器と腰岳系黒曜石製の石器。30 号土坑からは縄文土器とみられる小片。31・32 号土坑からは縄文土器とみられる小片と腰岳系黒曜石製の石器。33 号土坑からは縄文土器とみられる小片と腰岳系黒曜石製のナイフ形石器などの石器類，



第 26 図　　I 区土坑実測図 4 （1/80）

34 号土坑からは 30 点以上の石器類が出土している。石材的にはその殆どが腰岳系黒曜石であるがサヌカイトや安山岩・チャート、そして阿蘇象ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩製のものなどが含まれている。35・36 号土坑からは腰岳系黒曜石製の石器がそれぞれ十数点。37 号土坑からは腰岳系黒曜石製の石器。38 号土坑からは縄文早期や後・晩期と思われる土器と 10 点の腰岳系黒曜石製石器を中心にサヌカイト製の石器。39 号土坑からは縄文後期後葉とみられる土器と腰岳系黒曜石・サヌカイト製の石器。

40 号土坑からは縄文土器とみられる小片と腰岳系黒曜石製の石器が十数点。41 号土坑からは縄文土器と腰岳系黒曜石製の石器が出土している。

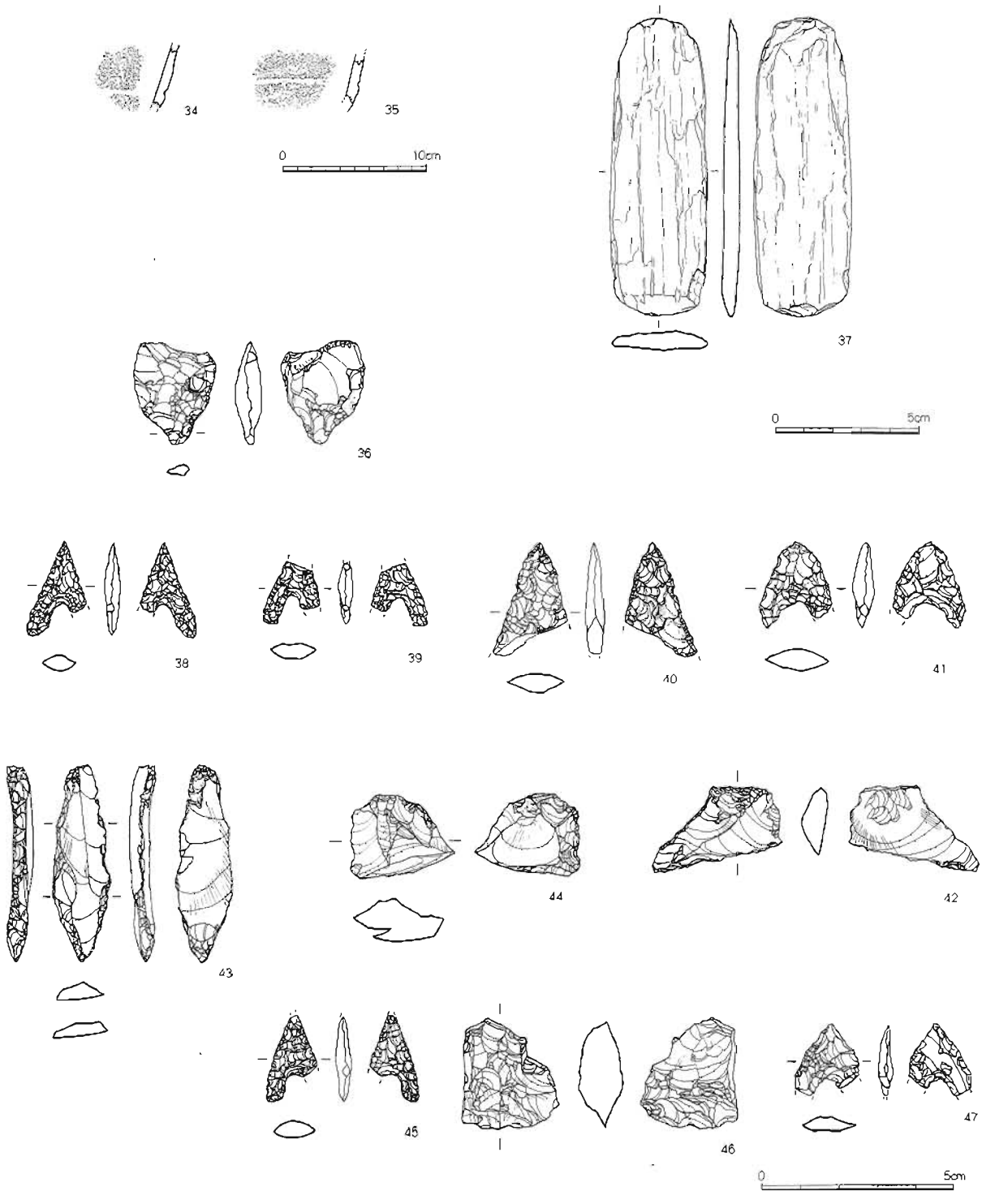
出土遺物（第 27 図　図版 8 ～ 10）

34・35 は 28 号土坑出土の縄文土器の胴部片である。外面には 1 条の沈線が巡る。同一個体とみられる。

36 は 4 号土坑出土の二次加工剥片である。錐部の欠落した石錐の抓みの可能性もある。石材は腰岳系黒曜石である。

37 は 5 号土坑出土の磨製石斧である。刃部および側縁に研磨痕を観ることが出来る。石材は結晶片岩とみられる。

38 ～ 41・44・47 は石鏃である。38 ～ 40 は 20 号土坑、41 は 22 号土坑、45 は 34 号土坑、47 は 40 号土坑から

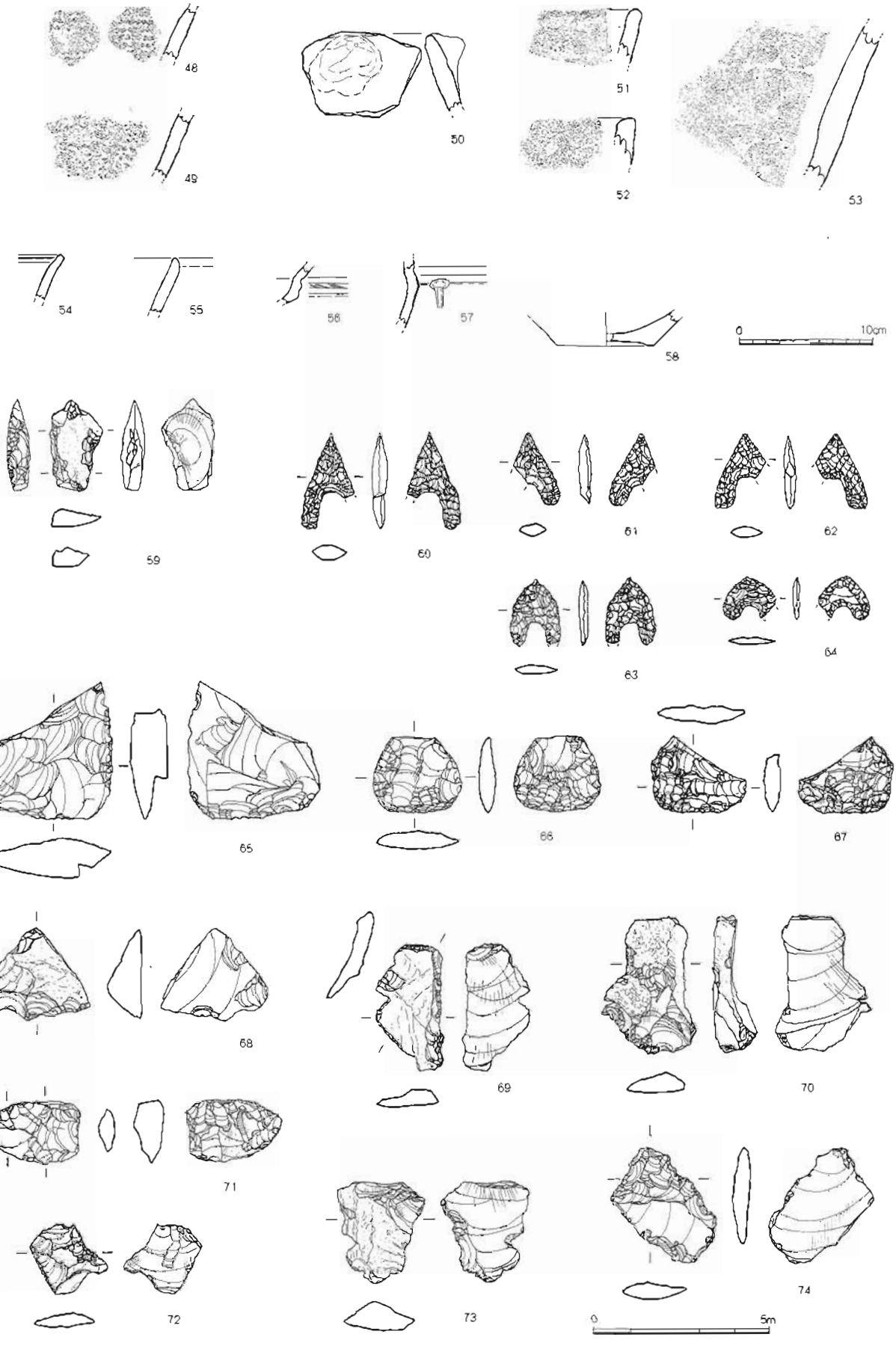


第27図　　I区土坑出土遺物実測図1（1/4・1/2・2/3）

の出土である。基部の欠落している40以外は、いずれも基部に抉入のある凹基無茎鏃である。45はいわゆる鍬形鏃である。38・39も基部の抉りが深く独特であることから、同様に鍬形鏃と判断されよう。石材的には38～40・45・47が腰岳系黒曜石製である。41は珪質岩とみられる。

42は22号土坑出土の使用痕剥片である。石材は腰岳系黒曜石製である。

43・44は33号土坑からの出土のものである。

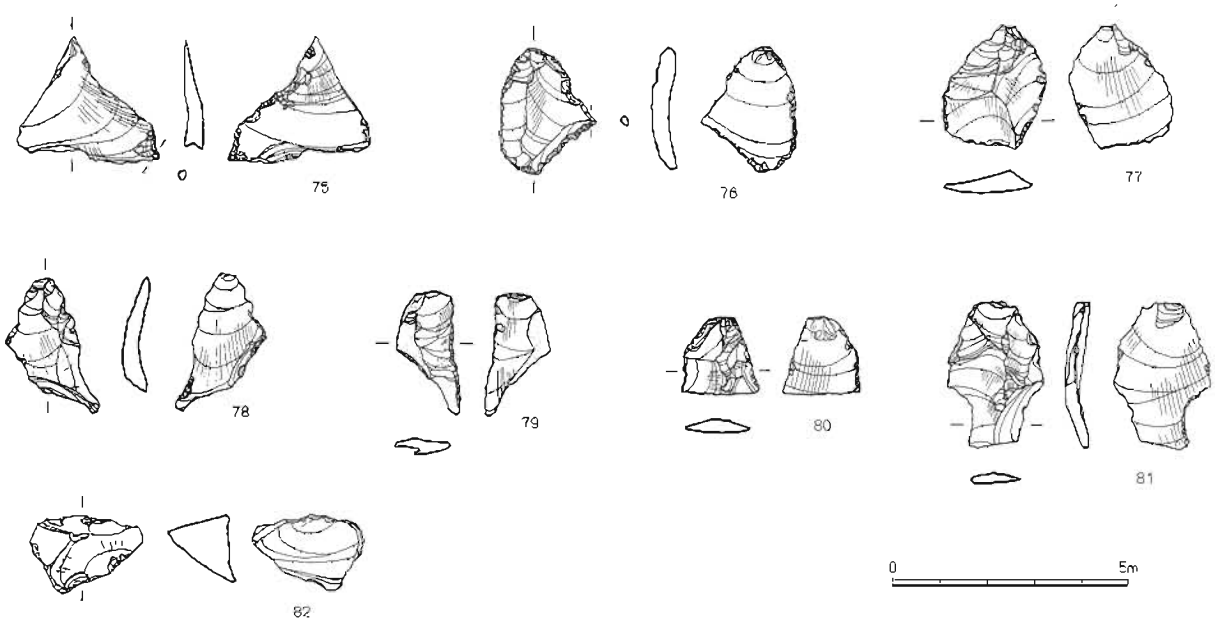


第 28 図　　1 区その他の出土遺物実測図 1 （1 / 4 ・ 2 / 3）

43は二側辺加工のナイフ形石器である。縦長剥片を素材としたもので、打面側を先端としている。基部の裏面は平坦剥離により整えられている。石材は腰岳系黒曜石である。後期旧石器時代の所産とみられる。

44は腰岳系黒曜石製の使用痕剥片である。

46は34号土坑出土のスクレイパーである。石材はチャートである。



第29図　　その他の出土遺物実測図2（2／3）

（3）その他の遺物（第28・29図　図版8・10）

48～53は早期の所産とみられるものである。

48・49は押型文土器である。48には外面に楕円文が、48には連珠文が内外面ともに横走施文されている。50はいわゆる瘤付き土器とみられる。内傾する口縁部にやや大ぶりの瘤状の突起が付けられている。51・52は無文土器の口縁部であろう。53は無文土器の胴部片とみられる。器壁の厚さは、厚いところで2cm弱程であり、かなり厚手である。

54～57は後期後葉の三万田式土器である。54・55は深鉢形土器の口縁部片である。54の口縁内面には1条の沈線が巡る。56・57は浅鉢形土器の胴部片である。56には2条の凹線間とその下に細線羽状文がみられる。57には2条の凹線と凹点により文様が施されている。凹点には垂下する凹文が付けられている。

58は上げ底となる底部片である。器形的に後期後葉の所産であろう。

59は腰岳系黒曜石製の台形様石器であり、後期旧石器時代の所産とみられる。

60～64は石鏃である。いずれも基部に抉入のある凹基無茎鏃である。60・62は典型的な鍬形鏃である。61も基部の抉りや脚部のつくりなどから、同様に鍬形鏃と判断されよう。63は側縁に屈曲する箇所があり、平面形が五角形を呈するものである。抉りは深い。石材的には、いずれも腰岳系黒曜石製である。

65～69はスクレイパーである。69はサイドスクレイパーである。いずれも腰岳系黒曜石製である。

70～74は二次加工剥片である。いずれも石材は腰岳系黒曜石である。

75～82は使用痕剥片である。いずれも石材は腰岳系黒曜石である。75・76には錐状に突出した刃部かと思われる突起状の部位が認められる。

（4）小結

I区の調査では、多くの縄文土器や石器などの遺物とともに、竪穴遺構や土坑などの遺構が確認された。

この調査で特に注目されるのは、竪穴遺構からの出土遺物である。多量に出土した土器は、その器形はもちろん、凹線や細線羽状文など文様の属性などから、いわゆる三万田式土器の範疇に収まるものであり、縄文時代後期後葉に当てられる。文様を有さないものや底部片においても、その器形や形態などから同期のものとみて間違いないであろう。

日田市およびその周辺において、いわゆる三万田式土器は各所でその出土がみられる。資料的にまとまって出土した遺跡としては、土偶が複数出土したことでも知られる三和敎田遺跡（註1）が挙げられる。しかしここでは、縄文時代後期の遺物は溝状遺構や自然流路からの出土であり、三万田式土器以降の後期末葉の遺物も含まれており、時期幅が広く一時期のセット関係を把握することなどは出来ていないようだ。

ここで、改めて葛原遺跡I区の竪穴遺構出土土器をみてみると、浅鉢形土器・深鉢形土器それぞれに属性的にまとまりが窺え、一時期の良好なセットとして捉えることが出来る。大分県における（大野川中流域を中心とした）三万田式土器の編年は、惣田期→駒方期→内河野期（1号住→2号住→3号住）→生野期→池在期→夏足原期の変遷が提示されている（註2）。葛原I区竪穴遺構の資料は、口縁部の形状など多少の相違はあるものの、それらが持つ属性のあり方などから内河野2号住資料との類似が看取されることから、内河野期と並行する良好なセット資料と言えよう。

筑後川上流域では、この時期のまとまった良好な資料はあまり無いことから、今後基準となる資料となろう。また、北方に位置する周防灘沿岸の三万田式土器とも器面調整の面等で相違点があり、今後当該期の地域性を考えていく上でも良好な資料を得たと言えよう。

次に注目されるものとして、多くの出土をみた石器とその石材環境が挙げられる。

調査区内からは、全体で380点の石器が検出されているが、その九割以上の348点が腰岳系黒曜石製のものである。続いて14点のサヌカイト製、4点の姫島産黒曜石製のものの順となる。他の石材はそれぞれ1～3点となる。この中に阿蘇鍋ヶ鼻産ガラス質溶結凝灰岩製のものが1点含まれていることは興味深い。なお、これら石器類の中に西北九州産の腰岳系黒曜石が九割以上を占めるのに反して、近隣において産する小国産黒曜石は1点も見られない。

上記のような石器石材の状況は、縄文時代後期後葉の竪穴遺構のみをみても大きく変わらない。これまでに見てきたように、調査区内においては縄文時代後期後葉以外に後期旧石器時代と縄文時代早期の遺物が確認されているが、竪穴遺構以外の361点の石器をすべて時期別に分離することは出来ない。ただ、いずれにしても本遺跡地での腰岳系黒曜石の利用度の高さは、各時代を通しても変わらないと想定され、今後遺跡の立地を考える上で非常に興味深い

註

1）吉田博嗣 編『三和敎田遺跡C地点』大分県文化財調査報告書第98輯　大分県教育委員会　1997

2）後藤一重 編『野津川流域の遺跡VI 内河野遺跡』野津町教育委員会　1985

Ⅵ．まとめ

今回報告した調査内容は、記述してきたとおり3ヶ所の調査区において後期旧石器・縄文時代後期・弥生時代前期～中期の遺構や遺物を確認したことになる。

そもそも、この葛原遺跡では、早くから黒曜石製の石器が採集されてきており、以前までは“柴尾遺跡”という名称で、ナイフ形石器や細石器を伴う時期の遺跡として周知されてきた（註1）。このことを裏付けるかのように、これまで報告してきた各区においても数多くの石器が発見され、なかでもI区ではナイフ形石器など後期旧石器時代に相当する遺物が確認され、本遺跡が盆地周辺部にあって当該期の様相を知る上での重要な遺跡であることを証明した。しかしながら、他の吹上・小迫辻原・上野第一遺跡といった盆地周辺部の遺跡と同様に層位的な位置づけや、空間的なまとまり、さらには遺構の存在有無などの検証までには至ってはおらず、こうした点を考慮した調査・検討がこれからの大きな課題でもあろう。

I区での縄文時代後期の竪穴遺構は注目に値する。すでに、隣接する葛原遺跡J区の調査（註2）においても縄文時代と考えられる竪穴遺構が検出され、さらには葛原遺跡A区（註3）などでは土坑の存在も確認されているなど、台地上に縄文時代後期の集落が営まれていたことが判明した。このように縄文時代の遺構が検出された日田市内での事例としては、手崎遺跡（註4）・尾部田遺跡（註5）・求来里平島遺跡（註6）などが知られているが、その数は少ない。しかも、こうした遺跡はどちらかといえば河岸段丘や台地下といった沖積地に営まれており、本遺跡のように台地（丘陵）上に立地する例としては希で、これからの日田盆地における該期の縄文集落の実像を考える意味では貴重な資料を提示したといえる。

このほか、弥生時代の遺構も発見されている。昭和61年に実施した葛原遺跡の確認調査では、台地南側（第2図Ⅺ～ⅩⅢ）において弥生時代の遺構や遺物が確認され、この時期の遺構が存在することは明らかであった。今回のF・H区での竪穴住居や土坑は、前期末から中期前半に該当し、これまで確認されていた時期と同時期の遺構でもあり、台地縁辺部を中心にこの時期の集落が存在することをあらためて認識することができた。

註

1）吉留　秀敏　「第3節　大分の旧石器時代遺跡　6筑後川上流域」『大分県史』大分県　1983年

2）渡邉　隆行編　『葛原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第39集　日田市教育委員会　2002年

3）土居　和幸編　『葛原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第53集　日田市教育委員会　2004年

4）田中裕介他編　『日田市高瀬遺跡群の調査2』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　大分県教育委員会　1998年

5）行時　志郎編　『尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集　日田市教育委員会　2001年

6）土居　和幸編　『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集　日田市教育委員会　2002年

第１表　竪穴住居・竪穴遺構観察表

挿図番号	区名	遺構名	平面形	規　模				内部構造				備　考
				長軸長	短軸長	深さ	床面積	主柱穴	カマド位置	屋内土坑	ベッドの有無	
第 10 図	H区	１号住	不定形	5.3m ＋ α	2.6m ＋ α	30 ㎝	22.23 ㎡	－	－	－	－	
第 11 図	H区	２号住	方形	4.5m	4.2m ＋ α	15 ㎝	－	２本	－	－	－	
第 12 図	H区	３号住	（円形）	※ 2.5m	※ 2.4m	－	－	６本	－	－	－	
第 20 図	Ⅰ区	竪穴遺構	不整形	4.6m	3.4m ＋ α	36 ㎝	－	－	－	－	－	旧　１号住居

※柱間

第２表　掘立柱建物観察表

挿図番号	区名	遺構名	規模	梁間長	桁行長	柱間平均（梁間）	柱穴掘方	柱穴の深さ	備考
第 13 図	H区	1号掘立柱建物	2間×3間	3.7 ｍ	5.4 ｍ	1.85 ｍ	15 ～ 30cm	15 ～ 35 ㎝	方位は N-34°　-E

第３表　土坑観察表

挿図番号	区名	遺構名	形状	規　模			出土遺物	備　考
				長軸長	短軸長	深さ		
第 4 図	E区	1号土坑	円形	163	163	40	弥生土器（甕・壺）、石器（剥片）	
第 4 図	E区	2号土坑	不整形	110	77	26	弥生土器片	
第 5 図	E区	3号土坑	長方形	132	56	15	弥生土器片、石器（剥片）	
第 5 図	E区	4号土坑	－	(120)	98	(30)	弥生土器片	5・8 号に切る。
第 5 図	E区	5号土坑	不整形	(208)	(78)	(12)	弥生土器片	6 号に切る。
第 5 図	E区	6号土坑	長方形	193	(90)	22	弥生土器片	
第 5 図	E区	7号土坑	不整形	114	68	19	なし	8 号に切る。
第 5 図	E区	8号土坑	－	－	(54)	(15)	なし	
第 5 図	E区	9号土坑	不整形	138	65	15	なし	
第 5 図	E区	10 号土坑	不整形	74	50	19	なし	
第 5 図	E区	11 号土坑	不整形	55	50	9	なし	
第 5 図	E区	12 号土坑	不整形	128	68	19	弥生土器片	13 号に切る。
第 6 図	E区	13 号土坑	楕円形	(188)	100	14	弥生土器（甕）	
第 6 図	E区	14 号土坑	不整形	105	68	21	なし	15 号に切る。
第 6 図	E区	15 号土坑	不整形	(108)	(56)	(21)	なし	
第 6 図	E区	16 号土坑	長方形	143	89	39	弥生土器片、石器（打製石斧、剥片）	
第 6 図	E区	17 号土坑	不整形	139	112	34	弥生土器（甕）、石器（石鏃、剥片）	18・19 号に切る。
第 6 図	E区	18 号土坑	－	－	(66)	(9)	なし	
第 6 図	E区	19 号土坑	不整形	190	(85)	(15)	弥生土器（甕）	
第 6 図	E区	20 号土坑	不整形	(190)	77	(13)	なし	
第 6 図	E区	21 号土坑	長方形	179	78	22	弥生土器片	
第 7 図	E区	22 号土坑	長方形	109	70	11	なし	
第 7 図	E区	23 号土坑	不整形	119	69	10	なし	
第 7 図	E区	24 号土坑	長方形	117	74	16	なし	
第 7 図	E区	25 号土坑	長方形	169	87	13	なし	
第 7 図	E区	26 号土坑	楕円形	130	70	9	なし	
第 7 図	E区	27 号土坑	長方形	116	69	16	なし	
第 7 図	E区	28 号土坑	長方形	109	(90)	14	弥生土器（甕？）	29 号に切る。
第 7 図	E区	29 号土坑	長方形	165	(71)	13	弥生土器（甕？）	
第 7 図	E区	30 号土坑	不整形	61	53	19	なし	
第 7 図	E区	31 号土坑	楕円形	60	45	24	なし	
第 14 図	H区	1 号土坑	楕円形	65	45	16	なし	2 号住居付属遺構の可能性あり
第 14 図	H区	2 号土坑	楕円形	110	60	12	なし	
第 14 図	H区	3 号土坑	楕円形	70	50	15	なし	
第 14 図	H区	4 号土坑	隅丸長方形	330	190	24	石鏃	竪穴の可能性あり
第 15 図	H区	5 号土坑	隅丸長方形	305	210	20	弥生土器（甕）	竪穴の可能性あり
第 15 図	H区	6 号土坑	隅丸長方形	170	125	100	弥生土器（甕）、縄文土器（鉢）、石鏃、打製石斧	袋状貯蔵穴
第 15 図	H区	7 号土坑	長方形	120	60	18	なし	
第 16 図	H区	8 号土坑	不整形	225	110	22	石鏃	
第 16 図	H区	9 号土坑	隅丸長方形	290	265	48	2 次加工剥片	竪穴の可能性あり

第16図	□区	10号土坑	楕円形	95	55	25	縄文土器（鉢）	
第23図	□区	□号土坑	不整形	104	72	36	なし	
第23図	□区	□号土坑	隅丸方形	82	82	24	なし	
第23図	□区	□号土坑	円形	113	102	24	なし	
第26図	□区	□号土坑	不整形	360+㎝	200+㎝	45	縄文土器、石器	
第26図	□区	□号土坑	不整形	345	140	55	縄文土器、石器	
第26図	□区	□号土坑	不整形	300	190	50	石器	
第23図	□区	□号土坑	長楕円形	96	54	26	なし	
第23図	□区	□号土坑	不整形	208	140	47	なし	
第23図	□区	□号土坑	不整形	66	61	37	なし	
第23図	□区	10号土坑	不整形	186	60	42	なし	
第23図	□区	11号土坑	不整形	94	84	42	なし	
第23図	□区	12号土坑	不整形	123	116	36	なし	
第23図	□区	13号土坑	不整形	100	71	64	なし	
第23図	□区	14号土坑	方形	107	92	52	なし	
第23図	□区	15号土坑	円形	94	84	—	石器	
第23図	□区	16号土坑	楕円形	92	58	55	なし	
第24図	□区	17号土坑	不整形	82	54	39	なし	
第24図	□区	18号土坑	楕円形	76	65	63	なし	
第24図	□区	19号土坑	円形	68	66	44	なし	
第24図	□区	20号土坑	長楕円形	120	65	53	縄文土器、石器	
第24図	□区	21号土坑	隅丸方形	134	100	39	石器	
第24図	□区	22号土坑	円形	56	56	64	縄文土器、石器	
第24図	□区	23号土坑	隅丸方形	84	64	40	なし	
第24図	□区	24号土坑	隅丸方形	76	65	32	石器	
第24図	□区	25号土坑	隅丸方形	65	60	20	石器	
第24図	□区	26号土坑	隅丸方形	75	71	28	石器	
第24図	□区	27号土坑	楕円形	72	56	26	なし	
第24図	□区	28号土坑	楕円形	80	67	49	縄文土器、石器	
第24図	□区	29号土坑	不整形	194	182	38	なし	
第25図	□区	30号土坑	楕円形	89	74	32	縄文土器	
第25図	□区	31号土坑	長楕円形	72	46	56	縄文土器、石器	
第25図	□区	32号土坑	不整形	148	110	25	縄文土器、石器	
第25図	□区	33号土坑	隅丸方形	103	82	22	縄文土器、石器	
第25図	□区	34号土坑	楕円形	156	147	52	石器	
第25図	□区	35号土坑	不整形	152	88	28	石器	
第25図	□区	36号土坑	楕円形	192	143	40	石器	
第25図	□区	37号土坑	不整形	94	77	36	石器	
第26図	□区	38号土坑	不整形	495	395	107	縄文土器、石器	
第26図	□区	39号土坑	不整形	355	155	95	縄文土器、石器	
第26図	□区	40号土坑	不整形	395	225	38	縄文土器、石器	
第25図	□区	41号土坑	不整形	186	97	32	縄文土器、石器	

法量の単位は㎝。（）書きは、残存を表す。土層は、一層の㎝の場合を記載している。

第4表　溝観察表

挿図番号	区名	遺構名	規模			備考
			長軸長	短軸長	深さ	
第9図	H区	1号溝	4.8ｍ	1.1ｍ	60㎝	
第9図	H区	2号溝	17.3ｍ	2.1ｍ	25㎝	

第5表　出土土器観察表

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第8図1	F区	19土	弥生	甕	−	−	−	(3.1)	刷毛後ナデ	ナデ	ＡＤＥＨ	やや不良	暗黄褐色	黄褐色	
第8図2	F区	17土	弥生	甕	−	−	−	(5.4)	ナデ	ナデ	ＡＤＥＨ	不良	暗黄褐色	暗黄褐色	

第８図３	E区	１土	弥生	甕	(26.8)	－	－	(5.5)	ナデ	ナデ	ACEH	不良	黄褐色	黄褐色	
第８図４	E区	１土	弥生	甕	(23.0)	－	－	(17.2)	ナデ	ナデ	ADEH	不良	赤褐色	明黄褐色	
第８図５	E区	１土	弥生	壺	(19.0)	－	－	(13.0)	不明	不明	ADEH	不良	黄褐色	黄褐色	
第８図６	E区	13 土	弥生	甕	－	－	(8.2)	(5.4)	不明	不明	ADEH	☒不良	黄褐色	暗褐色	
第８図７	E区	17 土	弥生	ミニチュア	－	－	(2.1)	(1.3)	指押し	指押し	AEH	良	暗褐色	明褐色	
第 17 図１	H区	１住 -8	弥生	甕	(17.0)	－	－	(10.4)	不明	不明	ABCH、安	不良	暗茶褐色	暗茶褐色	２と同一個体の可能性あり
第 17 図２	H区	１住 -7	弥生	甕	－	－	(6.8)	(7.6)	刷毛後ナデ	ナデ	ABCH	不良	暗茶褐色	暗茶褐色	１と同一個体の可能性あり
第 17 図３	H区	１住 -2	弥生	甕	19.0	－	－	(10.9)	不明	不明	ABCH	不良	暗褐色	暗褐色	４と同一個体の可能性あり、沈線☒巡☐す
第 17 図４	H区	１住 -1	弥生	甕	－	－	(9.5)	(8.0)	刷毛後ナデ	ナデ	ABCH	不良	暗茶褐色	暗茶褐色	３と同一個体の可能性あり
第 17 図５	H区	１住 -7	弥生	甕	(22.5)	－	－	(13.0)	刷毛後ナデ	ナデ	ABCH、安	不良	暗褐色	暗褐色	
第 17 図６	H区	１住 -11	弥生	甕	(20.2)	－	－	(8.3)	刷毛後ナデ	ナデ	ABCH	☒☒不良	暗黒褐色	暗黒褐色	沈線☒巡☐す
第 17 図７	H区	１住 -19	弥生	甕	－	－	7.5	(11.9)	刷毛後ナデ	ナデ	ABCH、安、黒	不良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第 17 図８	H区	１住 -3	弥生	壺	－	－	6.8	(7.7)	ナデ	ナデ	ABCH	不良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第 17 図９	H区	１住 -6	弥生	甕	－	－	4.8	(3.8)	刷毛後ナデ	ナデ	ABCH	不良	淡茶褐色	淡茶褐色	
第 17 図 10	H区	１住 -14	弥生	甕	－	－	6.4	(3.4)	刷毛後ナデ	ナデ	ABCH	不良	暗褐色	暗褐色	
第 17 図 11	H区	１住 -18	弥生	甕	－	－	7.0	(6.5)	刷毛後ナデ	ナデ	ABCH	☒☒不良	淡茶褐色	淡茶褐色	
第 17 図 12	H区	１住 -17	弥生	甕	－	－	7.4	(6.0)	不明	不明	ABCH	不良	暗褐色	暗褐色	
第 17 図 13	H区	１住 -10	弥生	壺	－	－	7.8	(8.3)	刷毛後ナデ	ナデ	ABCH	良	暗褐色	暗褐色	
第 17 図 14	H区	５土 -1	弥生	甕	(21.4)	－	6.0	21.7	不明	不明	ABCH	不良	暗褐色	暗褐色	
第 17 図 15	H区	５土	縄文	鉢	－	－	－	(4.6)	不明	不明	ABC	不良	暗黒褐色	暗黒褐色	
第 17 図 16	H区	６土－上層	弥生	甕	－	－	－	(1.8)	不明	不明	ABC	良	淡茶褐色	淡茶褐色	
第 17 図 17	H区	６土－下層	縄文	深鉢	(25.8)	－	－	(4.5)	不明	不明	ABC	不良	暗褐色	暗褐色	口縁端部に沈線あり
第 17 図 18	H区	10 土	縄文	深鉢	－	－	(7.0)	(1.8)	不明	不明	ABC	☒☒不良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第 21 図☐	I区	１住	縄文	浅鉢	－	－	－	－	沈線後ミガキ	ミガキか	ACE	良	茶色	茶色	
第 21 図２	I区	１住	縄文	浅鉢	－	－	－	－	ミガキ	沈線後ミガキ	ACDE	良	黒褐色	淡黒褐色	細線羽状文あり
第 21 図３	I区	１住	縄文	浅鉢	－	－	－	－	ミガキ	沈線後ミガキ	ACEG	良	明黄土色	明黄土色	細線羽状文あり
第 21 図４	I区	１住	縄文	浅鉢	－	－	－	－	ミガキか	沈線後ミガキ	ACEG	良	明褐色	淡黄褐色	
第 21 図５	I区	１住	縄文	浅鉢	－	－	－	－	沈線後ミガキ	ミガキ	ACDE	良	黒褐色	黒褐色	
第 21 図６	I区	１住	縄文	浅鉢	－	－	－	－	ミガキか	不明瞭	ACE	良	褐色	淡黄褐色	
第 21 図７	I区	１住	縄文	浅鉢	－	－	－	－	不明瞭	不明瞭	ACDE	良	淡茶褐色	淡茶褐色	
第 21 図８	I区	１住	縄文	浅鉢	－	－	－	－	回線後ミガキか	ミガキ	ACDE	良	黄褐色	明黄褐色	細線羽状文あり
第 21 図９	I区	１住	縄文	浅鉢	－	－	－	－	回線後回点後ミガキか	ミガキか	ACDE	良	褐色	淡褐色	
第 21 図 10	I区	１住	縄文	浅鉢	－	－	－	－	回線後回点後ミガキか	ミガキか☒	ACDE	良	淡黒褐色	赤茶色	
第 21 図 11	I区	１住	縄文	浅鉢	38.3	－	－	－	回線後回点後ミガキ	回線後ミガキ	ACDE	良	濃黄褐色	濃黄褐色	内面赤色顔料付着か
第 21 図 12	I区	１住	縄文	浅鉢	18.3	－	－	－	沈線後ミガキ	ミガキ	ACDE	良	黄褐色	黄褐色	
第 21 図 13	I区	１住	縄文	深鉢	－	－	－	－	不明瞭	沈線後ミガキか	ACEG	良	明黄土色	明黄土色	
第 21 図 14	I区	１住	縄文	深鉢	－	－	－	－	ミガキ	沈線後ミガキか	ACDE	良	明黒褐色	淡黄褐色	
第 21 図 15	I区	１住	縄文	深鉢	－	－	－	－	ミガキか	沈線後ミガキか	ACDE	良	淡黄茶色	淡黄褐色	
第 21 図 16	I区	１住	縄文	深鉢	－	－	－	－	ミガキ	沈線後ミガキ	ACDE	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 21 図 17	I区	１住	縄文	深鉢	－	－	－	－	ミガキ	沈線後ミガキ	ACDE	良	淡褐色	淡黄褐色	
第 21 図 18	I区	１住	縄文	深鉢	－	－	－	－	ミガキか☒	ミガキ	ACDE	良	淡黄褐色	黄灰褐色	
第 21 図 19	I区	１住	縄文	深鉢	－	－	－	－	ミガキ	ミガキ	ACE	良	黄灰褐色	黄灰褐色	
第 21 図 20	I区	１住	縄文	深鉢	－	－	－	－	ミガキ	ミガキ	ACDE	良	淡褐色	明褐色	焼成後の穿孔あり
第 21 図 21	I区	１住	縄文	深鉢	－	－	－	－	回線後ミガキ	ミガキ	ACDE	良	淡黄褐色	淡黒褐色	
第 21 図 22	I区	１住	縄文	深鉢	－	－	－	－	回線後ミガキ	ミガキ	ACDE	良	褐色	黄土色	
第 22 図 23	I区	１住	縄文	深鉢	39.7	31.0	－	－	丁寧なナデか（ミガキ☒）	丁寧なナデか（ミガキ☒）	ACDE	良	黄褐色	黄褐色	
第 22 図 24	I区	１住	縄文	深鉢	33.5	25.1	－	－	丁寧なナデか（ミガキ☒）	丁寧なナデか（ミガキ☒）	ACDE	良	淡茶褐色	明黄褐色	
第 22 図 25	I区	１住	縄文		－	－	6.7	－	ミガキ	ミガキ	ACDE	良	黄灰褐色	茶灰色	
第 22 図 26	I区	１住	縄文		－	－	5.2	－	ミガキ	ミガキ	ACDE	良	明黄灰色	薄黄灰色	
第 22 図 27	I区	１住	縄文		－	－	5.3	－	不明瞭	不明瞭	ACDE	良	淡茶色	淡黄褐色	
第 22 図 28	I区	１住	縄文		－	－	5.6	－	ミガキか	ミガキか	ACDE	良	淡茶色	淡黄灰色	
第 27 図 34	I区	28 土	縄文		－	－	－	－	不明瞭	不明瞭	ACE	良	暗黄茶色	黄灰褐色	
第 27 図 35	I区	28 土	縄文		－	－	－	－	不明瞭	不明瞭	ACE	良	淡黄茶色	黄灰褐色	
第 28 図 48	I区	一括	縄文		－	－	－	－	連珠文後ナデ	連珠文後ナデ	ACDE	良	淡茶色	淡茶色	
第 28 図 49	I区	一括	縄文		－	－	－	－	楕円文後ナデ	ナデ	ABCE	良	薄茶色	淡褐色	
第 28 図 50	I区	一括	縄文		－	－	－	－	不明瞭	不明瞭	ACE	良	淡黄茶色	暗黄褐色	
第 28 図 51	I区	一括	縄文		－	－	－	－	不明瞭	不明瞭	ABCE	良	淡茶灰褐色	淡灰褐色	
第 28 図 52	I区	一括	縄文		－	－	－	－	ナデか	ナデか	ACE	良	淡黄茶色	淡黄茶色	
第 28 図 53	I区	一括	縄文		－	－	－	－	不明瞭	不明瞭	ACE	良	明黄土色	明黄土色	
第 28 図 54	I区	一括	縄文		－	－	－	－	不明瞭	沈線後不明瞭	ACE	良	濃褐色	濃茶褐色	
第 28 図 55	I区	一括	縄文	深鉢	－	－	－	－	ミガキ	丁寧なナデ	ACDE	良	淡茶褐色	淡茶灰褐色	
第 28 図 56	I区	一括	縄文	浅鉢	－	－	－	－	回線後ミガキ	ミガキ	ACE	良	明黄土色	明黄土色	細線羽状文あり
第 28 図 57	I区	一括	縄文		－	－	－	－	回線後回点後ミガキか	ミガキか	ACDE	良	淡茶褐色	淡黄褐色	
第 28 図 58	I区	一括	縄文		－	－	7.9	－	不明瞭	不明瞭	ACE	良	淡茶色	黄褐色	

単位は㎝。（）は現存長。

胎土 ☐A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒　安は安山岩 黒は黒曜石

第６表　出土石器観察表

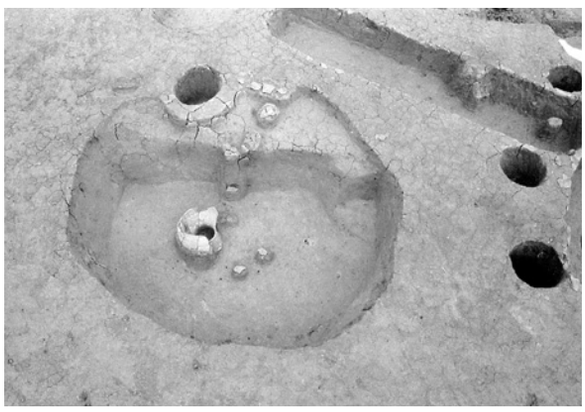
挿図番号	区名	遺構名	器種	材質	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
第８図８	Ｆ区	１土	石鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.8	
第８図９	Ｆ区	17 土	石鏃	安山岩	(2.1)	1.4	0.45	1.3	
第８図 10	Ｆ区	16 土	打製石斧		(18.3)	(7.9)	1.6	298.5	
第 18 図 19	Ｈ区	６土	石鏃	黒曜石	(2.8)	(1.1)	0.4	1.0	
第 18 図 20	Ｈ区	４土	石鏃	姫島産黒曜石	(1.6)	1.9	0.4	1.1	
第 18 図 21	Ｈ区	８土	石鏃	サヌカイト	2.2	(1.6)	0.3	0.5	
第 18 図 22	Ｈ区	６土	２次加工剥片	黒曜石	2.0	1.8	0.4	1.0	
第 18 図 23	Ｈ区	９土	２次加工剥片	黒曜石	2.1	1.4	0.5	1.6	
第 18 図 24	Ｈ区	１住	２次加工剥片	黒曜石	3.2	1.8	0.3	2.3	
第 18 図 25	Ｈ区	９土	２次加工剥片	黒曜石	3.7	1.1	0.7	2.4	
第 18 図 26	Ｈ区	Ｐ４	打製石斧	安山岩	(6.3)	6.6	1.0	52.6	
第 18 図 27	Ｈ区	６土	打製石斧	安山岩	9.9	6.3	1.0	57.0	
第 18 図 28	Ｈ区	一括	石核	サヌカイト	5.6	(3.0)	1.8	32.4	
第 22 図 29	Ｉ区	竪	石鏃	結晶片岩	1.75	1.75	0.30	0.7	
第 22 図 30	Ｉ区	竪	スクレイパー	腰岳系黒曜石	1.15	3.40	0.40	2.1	
第 22 図 31	Ｉ区	竪	二次加工剥片	姫島産黒曜石	2.95	2.80	0.50	3.7	
第 22 図 32	Ｉ区	竪	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.35	1.90	0.30	1.2	
第 22 図 33	Ｉ区	竪	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	1.60	2.05	0.45	1.3	
第 27 図 36	Ｉ区	４土	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.65	2.20	0.70	3.4	石錘のツマミか？
第 27 図 37	Ｉ区	５土	石斧	結晶片岩	10.25	3.40	0.65	34.6	
第 27 図 38	Ｉ区	20 土	石鏃	腰岳系黒曜石	2.45	(1.50)	0.40	0.8	
第 27 図 39	Ｉ区	20 土	石鏃	腰岳系黒曜石？	(1.60)	(1.45)	0.40	0.6	
第 27 図 40	Ｉ区	20 土	石鏃	腰岳系黒曜石	(2.95)	(1.90)	0.50	1.7	
第 27 図 41	Ｉ区	22 土	石鏃	珪質岩か	2.25	(1.90)	0.45	1.4	
第 27 図 42	Ｉ区	22 土	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.20	3.40	0.70	2.9	
第 27 図 43	Ｉ区	33 土	ナイフ形石器	腰岳系黒曜石	5.10	1.50	0.70	4.1	
第 27 図 44	Ｉ区	33 土	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.15	2.75	1.20	5.5	スクレイパーか
第 27 図 45	Ｉ区	34 土	石鏃	腰岳系黒曜石	(2.25)	(1.30)	0.40	0.8	
第 27 図 46	Ｉ区	34 土	スクレイパー	チャート	2.90	2.50	1.20	9.2	
第 27 図 47	Ｉ区	40 土	石鏃	腰岳系黒曜石	(1.85)	(1.70)	(0.35)	0.7	
第 28 図 59	Ｉ区	一括	台形様石器	腰岳系黒曜石	2.55	1.50	0.70	2.0	
第 28 図 60	Ｉ区	一括	石鏃	腰岳系黒曜石	2.65	(2.00)	0.45	0.9	
第 28 図 61	Ｉ区	一括	石鏃	腰岳系黒曜石	2.00	(1.30)	0.35	0.6	
第 28 図 62	Ｉ区	一括	石鏃	腰岳系黒曜石	2.10	(1.45)	0.35	0.6	
第 28 図 63	Ｉ区	一括	石鏃	腰岳系黒曜石	1.85	1.45	0.25	0.5	
第 28 図 64	Ｉ区	一括	石鏃	腰岳系黒曜石	1.20	(1.50)	0.20	0.3	
第 28 図 65	Ｉ区	一括	スクレイパー	腰岳系黒曜石	3.85	3.80	1.10	12.6	
第 28 図 66	Ｉ区	一括	スクレイパー	腰岳系黒曜石	2.15	2.50	0.50	3.1	石錘のツマミか？
第 28 図 67	Ｉ区	一括	スクレイパー	腰岳系黒曜石	2.15	2.70	0.55	2.7	サイドブレイドか
第 28 図 68	Ｉ区	一括	スクレイパー	腰岳系黒曜石	2.65	3.05	0.95	5.9	
第 28 図 69	Ｉ区	一括	サイド・スクレイパー	腰岳系黒曜石	3.55	1.90	0.90	3.3	
第 28 図 70	Ｉ区	一括	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	3.85	2.75	1.30	6.9	スクレイパーか
第 28 図 71	Ｉ区	一括	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	1.80	2.75	0.85	3.9	
第 28 図 72	Ｉ区	一括	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.00	2.20	0.40	1.3	
第 28 図 73	Ｉ区	一括	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.85	2.50	0.85	4.9	
第 28 図 74	Ｉ区	一括	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	3.25	2.95	0.55	4.2	
第 29 図 75	Ｉ区	一括	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.65	3.00	0.40	2.0	
第 29 図 76	Ｉ区	一括	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.60	2.00	0.50	2.1	
第 29 図 77	Ｉ区	一括	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.55	2.20	0.45	1.9	
第 29 図 78	Ｉ区	一括	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.90	1.95	0.50	1.3	
第 29 図 79	Ｉ区	一括	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.55	1.40	0.35	0.8	
第 29 図 80	Ｉ区	一括	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	1.65	1.65	0.30	1.0	
第 29 図 81	Ｉ区	一括	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	3.10	2.05	0.55	1.8	
第 29 図 82	Ｉ区	一括	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	1.60	2.35	1.40	3.3	

※単位は cm。（　）は現存長・重

写真図版１

Ｆ区調査前

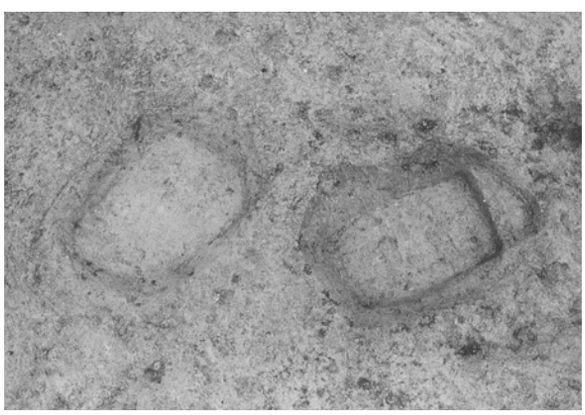
Ｆ区調査後



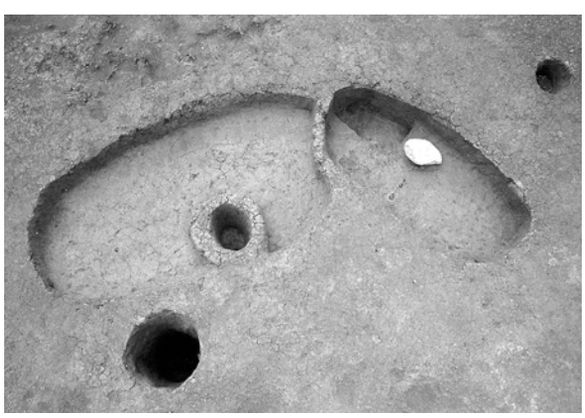
Ｆ区１号土坑

Ｆ区１号土坑遺物出土状況

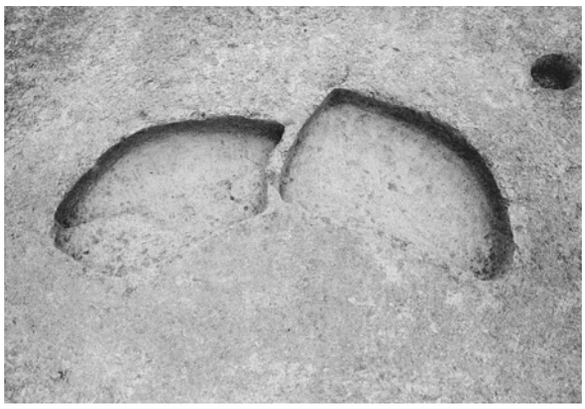
Ｆ区３～６号土坑



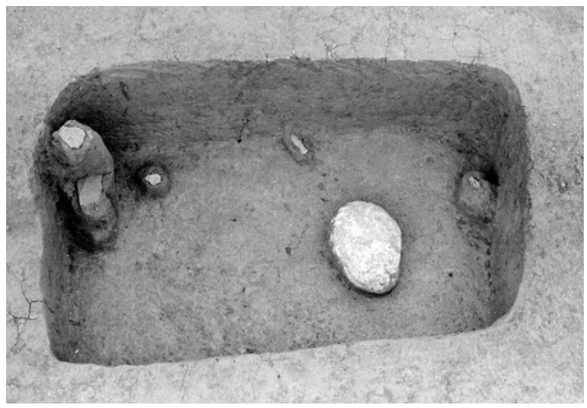
Ｆ区 10・11 号土坑



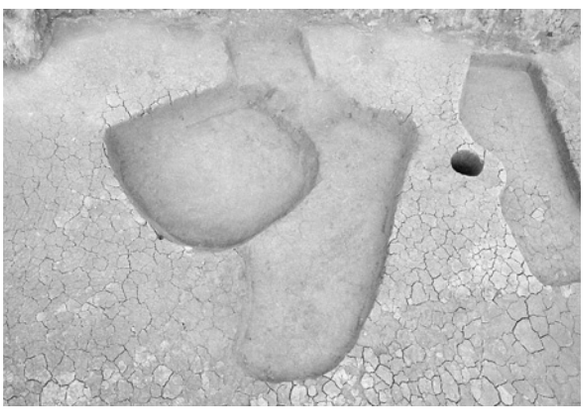
Ｆ区 12・13 号土坑



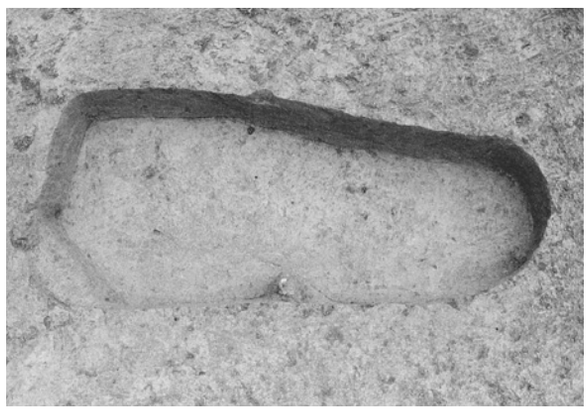
Ｆ区 14・15 号土坑



Ｆ区 16 号土坑

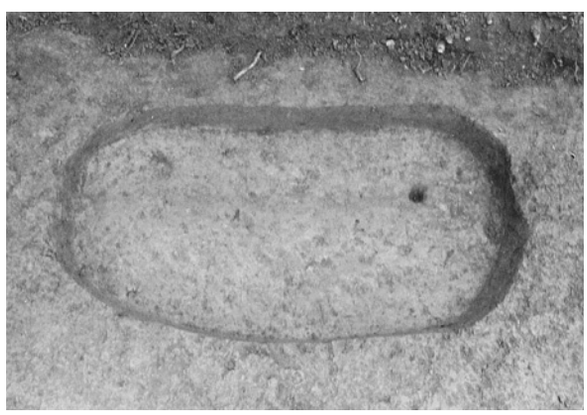


Ｆ区 17 ～ 20 号土坑



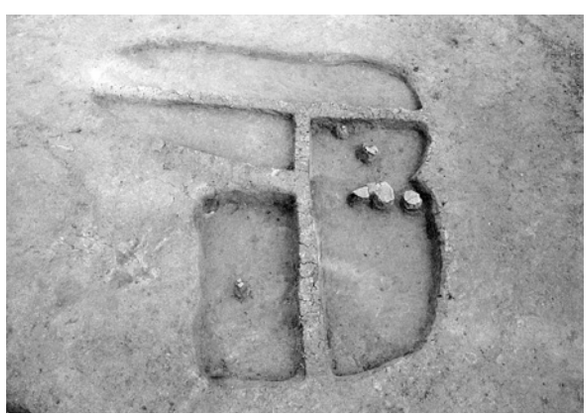
Ｆ区 21 号土坑

Ｆ区 22 号土坑



Ｆ区 24 号土坑

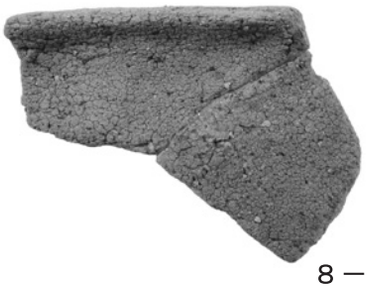
Ｆ区 25 号土坑



Ｆ区 28・29 号土坑

写真図版３

８－１



８－２

８－３

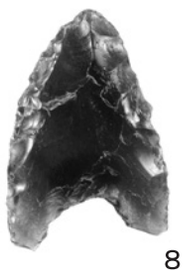
８－４

８－５

８－６

８－７

８－８（表）



８－８（裏）

８－９

８－10（表）

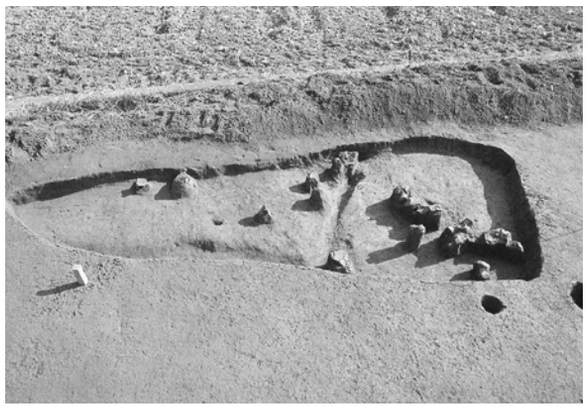
８－10（裏）

調査区全景（東より）

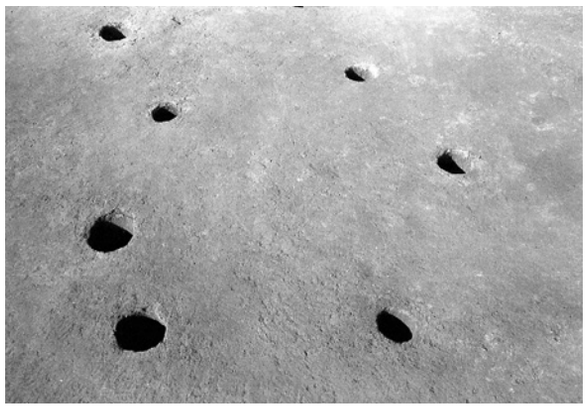
調査区全景（南より）

調査区全景（西より）

写真図版５

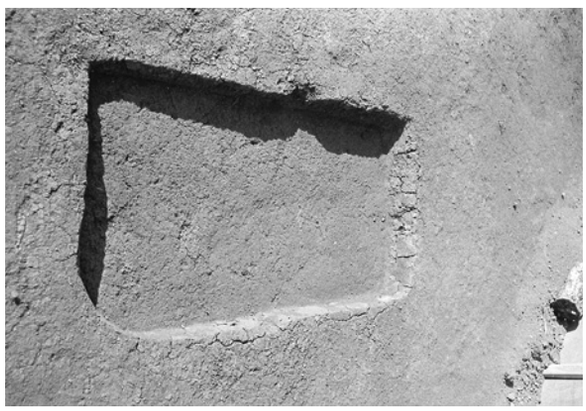


１号竪穴住居

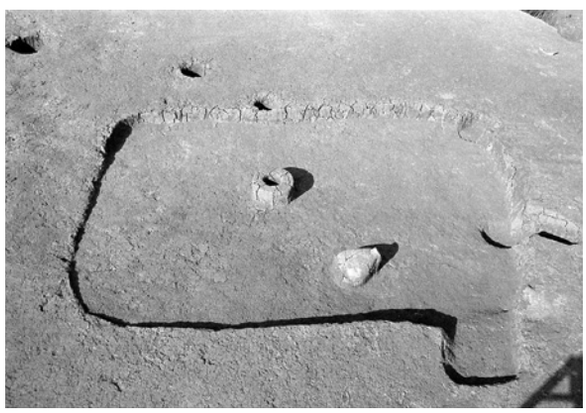


２号竪穴住居

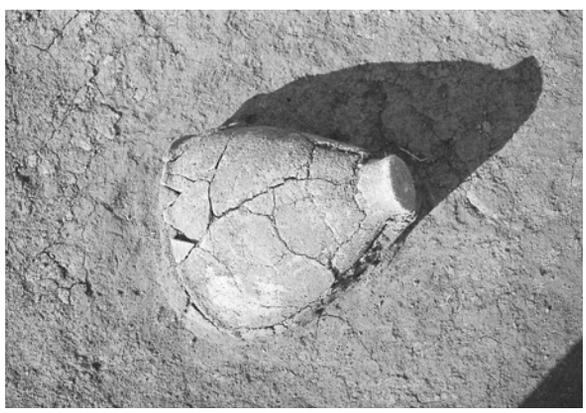
３号竪穴住居



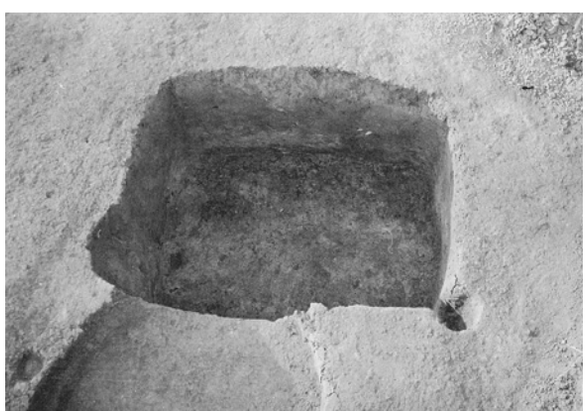
４号土坑



５号土坑



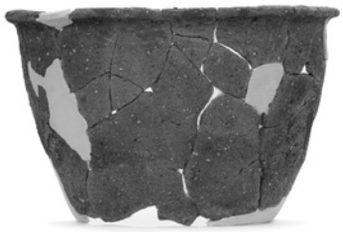
５号土坑内土器出土状況



６号土坑

９号土坑

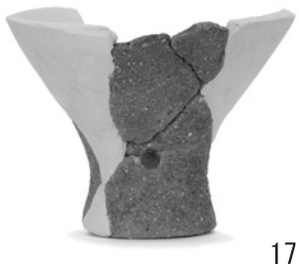
17 － 1



17 － 3

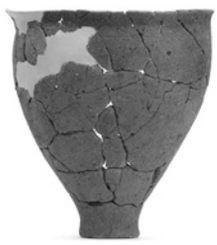
17 － 5

17 － 6



17 － 7

17 － 13



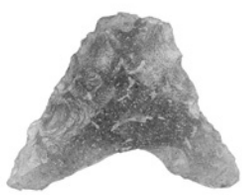
17 － 14

17 － 15

17 － 16

17 － 17

18 － 19



18 － 20

18 － 21

18 － 23

18 － 24

18 － 26

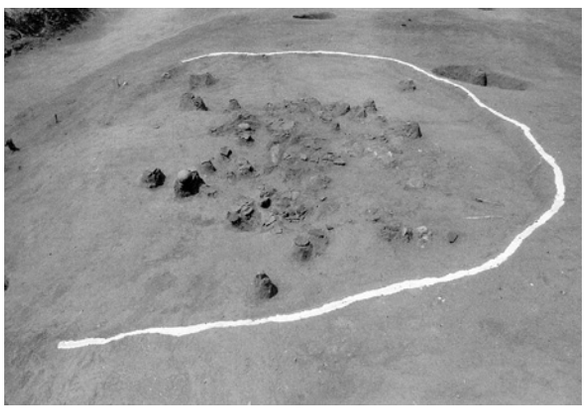
18 － 27

18 － 28

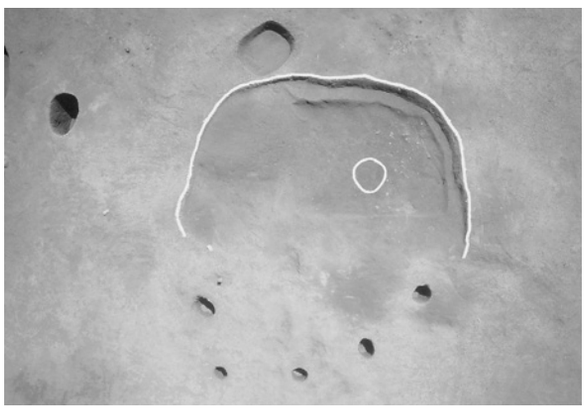
写真図版７

調査区遠景１

調査区遠景２

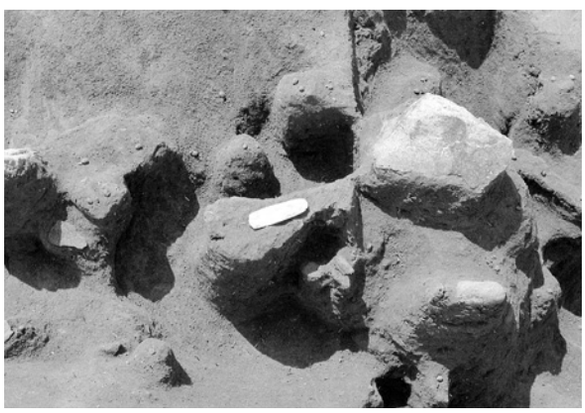


竪穴遺構１

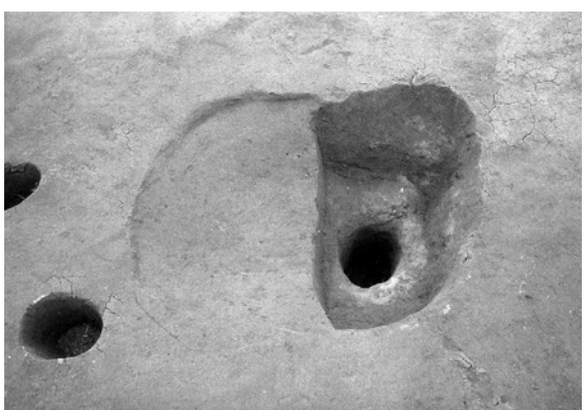


竪穴遺構２

竪穴遺構遺物出土状況



５号土坑遺物出土状況



14 号土坑

18 号土坑

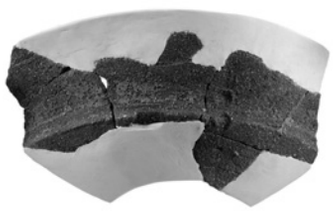
21 － 2

21 － 3

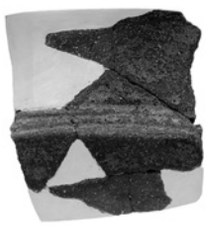
21 － 5

21 － 8

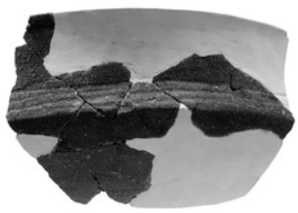
21 － 9



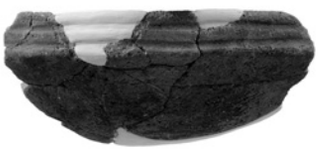
21 － 10



21 － 11a



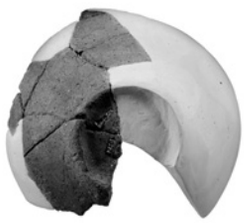
21 － 11b



21 － 12

21 － 21

21 － 22



22 － 25

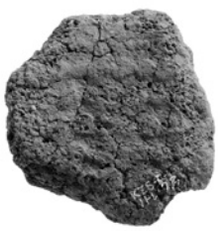
22 － 26

22 － 27

22 － 28

27 － 34・35

28 － 48a



28 － 48b

28 － 49

28 － 50

28 － 53

28 － 56

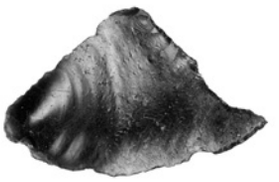
28 － 57

28 － 58

写真図版９

22 — 29

22 — 30a

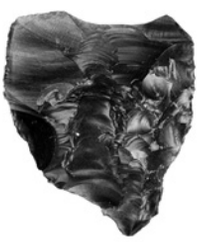


22 — 30b

22 — 31a

22 — 31b

22 — 37

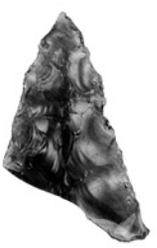


27 — 36a

27 — 36b

27 — 38

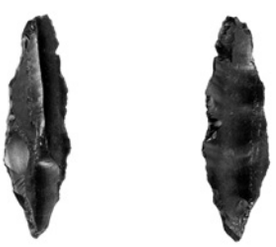
27 — 39



27 — 40

27 — 41

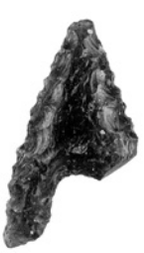
27 — 42



27 — 43a　27 — 43b

27 — 43c

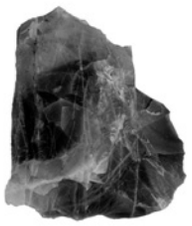
27 — 43d



27 — 45

27 — 47a

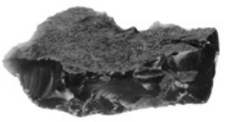
27 — 47b



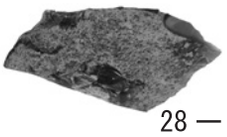
27 — 46

28 — 59a

28 — 59b



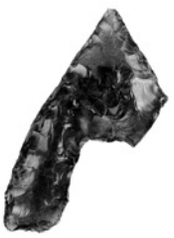
28 — 59c



28 — 59d

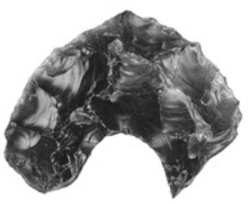
28 — 60

28 — 61



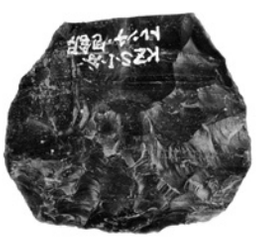
28 — 62

28 — 63



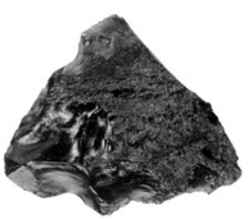
28 — 64

28 — 65



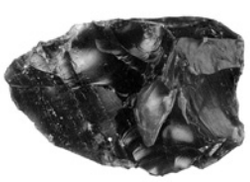
28 — 66

28 — 67



28 — 68

28 — 69

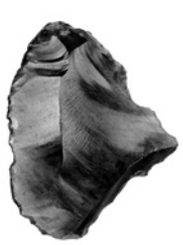


28 — 71a

28 — 71b

28 — 74

29 — 75



29 — 76

報　告　書　抄　録

ふりがな	くずばるいせき
書　　名	葛原遺跡Ⅲ
副書名	Ｆ・Ｈ・Ｉ区の調査報告
巻　　次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	79
編著者名	土居和幸・行時志郎・今田秀樹
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒 877-0077　日田市南友田町 516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒 877-8601　日田市田島 2-6-1
発行年月日	2007 年 3 月 30 日（平成 19 年 3 月 30 日）

所収遺跡名	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
葛原遺跡Ｆ区	大分県日田市 大字西有田 字葛原	44204-6	651057	33－21	131－25	19870803 ～ 19871008	497 ㎡	道路建設
葛原遺跡Ｈ区						19941216 ～ 19950121	440 ㎡	水道施設建設
葛原遺跡Ｉ区						19960710 ～ 19960810	3000 ㎡	工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
葛原遺跡Ｆ区	集落跡	弥生時代	土坑 30 基、ピット 93	弥生土器、石器	
葛原遺跡Ｈ区	集落跡	縄文時代 弥生時代	竪穴住居 3 軒、掘立柱建物 1 棟、土坑 10 基、溝 2 条	縄文土器 弥生土器、石器	
葛原遺跡Ｉ区	集落跡	旧石器時代 縄文時代	竪穴遺構 1 基、土坑 41 基	ナイフ形石器 台形様石器 縄文土器、石器	

葛原遺跡Ⅲ

2007 年 3 月 30 日

編　集　日田市教育委員会財保護課
877-0077　大分県日田市南友田町 516-1

発　行　日田市教育委員会
877-8601　大分県日田市田島 2-6-1

印　刷　山本印刷有限会社
〒 877-0059　大分県日田市大日町 3986-3